

4. 津島岡大遺跡第5次調査出土の縄文時代後期石器群の技術構造

1. はじめに

石器研究においては、近年、技術構造の研究が行われるようになってきている。これは、主として旧石器時代研究において、それまでの編年重視型の石器研究をこえる形での新しい石器研究法が提唱され⁽¹⁾、それを実践する形で、石器群が構造体をなしていることが指摘されて⁽²⁾以来、石器群の構造の変化は文化の変容に関わることで、常に重視されている視点である。こうした研究視点は、これまで主として旧石器研究、例えば尖頭器を含む石器群の研究⁽³⁾、瀬戸内地方を中心とする国府型ナイフ形石器を指標とする石器群の研究⁽⁴⁾などに対して行われている。縄文時代の石器研究でも、石器の個別の記載といった報告にとどまらず、剥片剥離技術の研究⁽⁵⁾や、さらに進んで石器群総体を扱う研究が行われつつある。その研究の例が、石材の獲得から各石器の完成に至るまでの製作技術の組み合わせといった石器群の構造の研究⁽⁶⁾である。こうした研究が西日本でも行われ、一定の成果をあげている⁽⁷⁾。

西日本の縄文時代研究では、後・晩期になって土器組成、石器組成、遺跡の分布に大きな画期が認められることが指摘されている。各遺跡の立地などの条件により若干の差異はあるが、大まかにみれば、後期初頭における浅鉢の増加、晩期における壺の出現とその増加、山間部や火山灰台地、沖積地への遺跡の進出などである。石器組成の点では、石匙の減少とスクレイパーの増加、打製石鋏の出現と増加などが指摘されている⁽⁸⁾。こうした画期の原因を生産活動の変化と結び付け、農耕社会形成の胎動と結び付ける見解もあり⁽⁹⁾、最近になって注目を集めつつある研究分野である。

こうした中で、津島岡大遺跡は沖積地に立地し、縄文時代後・晩期の土器群、石器群などが出土し、貯蔵穴なども検出されている。石器においては縄文時代後・晩期に一般的な石器組成を示しながらも、石核が欠如していることや石鏃が小型であることなどが指摘されており、さらに周辺の遺跡と比較して、安山岩の搬入量に差があったこととそれに応じた石器製作法が存在したことが推定されている⁽¹⁰⁾。

今回、津島岡大遺跡第5次調査では縄文時代後期の石器群がまとまって出土しているので、以上の研究史をふまえたうえで、これを材料に縄文時代後期石器群の技術構造の1例を探り、その位置づけを考えてみたい。主として対象とする資料は、27b層上面で出土した資料と25a層、23層下面で出土した資料である。土器型式からみると、両者には若干の時期差が認められるが、縄文時代後・晩期を通じて、石器群の基本的な技術構造は変わらないとの立場から、特に断らない限り両者を総合して扱って差し支えないと考え、両者を総合して扱うことにする。

2. 石器組成

周辺で縄文時代後期の石器がまとまって出土した、広江・浜⁽¹¹⁾、洗谷⁽¹²⁾、永井⁽¹³⁾の3遺跡の石器組成と比較してみる。この3遺跡の石器組成を表1に示す。里木貝塚⁽¹⁴⁾は縄文時代中期の一般的な石器組成を示していると考えられるので、比較検討するために示すと、石器の総計は石鏃22点、石錐2点、磨製石斧5点、石匙32点、スクレイパー63点、叩石2点、凹石8点、石錘43点となっている。これとの比較から縄文時代後期になると、石鏃、石匙が減少し、⁽¹⁵⁾打製石鏃が新たに組成に加わることが指摘できる。中越利夫氏による西日本の縄文時代後期の石器組成の考察⁽¹⁶⁾からも同様の結果が得られている。

表14 縄文時代後期の石器組成

遺跡名	石鏃	スクレイパー	石匙	石錐	打製石鏃	楔形石器	盤状剥片	石核	磨製石斧	石錘	磨石	凹石	叩石	石皿
広江・浜	13	17	2		2	4	2	1	2	3				
洗谷	8	34	1		1	6	34	3		18	5		7	1
永井	86	194	5	5	117	34			9	3	18	5	4	68

※広江・浜遺跡については筆者が確認した分。洗谷貝塚についても一部実見。永井遺跡については、盤状剥片、石核の報告がなく、その点数は不明であるが、平井勝氏のご教示によれば、多数出土しているとのことである。

27b層上面と25a層、23層下面で出土した石器の組成は表14に示してある。縄文時代後期に一般的にみられる器種は一通りそろっている。出土した石器の点数は、居住期間の長短や使用期間が長い石器の他遺跡への持ち出しなどの条件も考慮しなければならないため、見かけの数字だけで判断することはできないが、27b層上面と25a層、23層下面で出土している土器の型式から、彦崎K II式直前の段階で土器2型式ほどの居住期間が推定できることを考え合わせると、27b層上面で安山岩製の打製石鏃が5点、25a層、23層下面で、在地の石材製であるが、打製石鏃が5点出土していることは、他の遺跡に比べて若干多いと考えて良いであろう。逆にスクレイパーが27b層上面と25a層、23層下面で合計11点というのは明らかに少ないであろう。

出土石器の点数については、後に詳しく検討することにして、ここでは今回出土した石器の組成は、縄文時代後期の一般的な石器組成を示していると考えておく。

3. 石材の搬入形態

石器石材の遠距離移動は旧石器時代から一般的にみられることで、原産地推定に始まり、石材の移動形態などは、交易の存在、集団関係を探るうえでしばしば問題になることである。今回出土した石器群の主要石材は安山岩である。この安山岩の新鮮な割れ面はわずかに青みがかった黒色で、ガラス光沢がある。風化した剥離面は青灰色である。自然面は薄茶色で、石理に沿った薄板状節理がみられる。こうした外観は香川県に産出するサヌカイトに代表される安

山岩に酷似するものである。遺跡周辺にはこうした安山岩の産地は知られておらず、遠方からの搬入であることは確実である。では、この安山岩の原産地はどこに推定できるであろうか。今回出土した遺物では原産地推定を行っていないが、百間川沢田遺跡⁽¹⁷⁾では剥片6点が白石純氏によって分析されている⁽¹⁸⁾。白石氏は蛍光X線分析による岩石成分と偏光顕微鏡による岩石鑑定を、原産地で採集した岩石と遺跡で出土した剥片相互で比較検討することにより、分析した6点の剥片はすべて香川県の金山が原産地であると推定している。百間川沢田遺跡で使用されている安山岩は津島岡大遺跡で出土している安山岩と全く同様の外観を呈していることから、両者は同じ原産地から搬入されている可能性が高い。また、鎌木義昌氏らによる研究例でもこの時期には香川県の金山産の安山岩が搬入されている例が多いとのことから⁽¹⁹⁾、今回扱う安山岩も香川県の金山から搬入されていると考えられる。

では、香川県の金山の安山岩が津島岡大遺跡にどのような状態で搬入されているのであろうか。広島県の洗谷貝塚⁽²⁰⁾では2カ所に合計34枚の大型の板状の安山岩が集積された状態で出土している。さらに同様の石材が周辺の遺跡⁽²¹⁾や山間部に入った帝釈峡遺跡群⁽²²⁾でも出土していることから、小野昭、竹広文明両氏⁽²³⁾はこれらの石材は香川県の金山から搬入され、一度洗谷貝塚に集積された後に周辺の遺跡に1、2枚の単位で運ばれたと考えている。津島岡大遺跡では今回の調査を含めて過去の調査でも、安山岩の搬入形態を推定させる資料はほとんど出土していない。ただ1点、今回の調査で、縄文時代晩期の層から盤状剥片と推定できる資料がある。これは22b層から出土したものである。半分ほどを欠損していて、重さは74.6gであるが、ほとんど加工した痕がなく、石器原材として搬入されたものと考えられる。周辺遺跡を見ると、時期は異なるが、周辺の百間川沢田遺跡高縄手B地区では縄文時代晩期の盤状の安山岩が大形石器とともに土壌に集積された状態で出土しており⁽²⁴⁾また、弥生時代の資料であるが⁽²⁵⁾百間川今谷遺跡⁽²⁶⁾や用木山遺跡⁽²⁷⁾でも安山岩の盤状剥片が出土していることから、津島岡大遺跡でも盤状剥片の状態で搬入された可能性が高いと考えられる。

4. 剥片剥離技術の検討

剥片剥離技術の検討は接合資料によることが最も望ましいが、今回扱った資料は、剥片剥離に関わる資料がすべて同じ外観の安山岩であるため、母岩別分類が不可能で、接合資料も皆無の状態である。そこで、剥片と石核の属性を検討し、両者の属性を対応させることで剥片剥離技術を復元することにする。

(I) 石核の検討

石核は27b層上面で3点(図116-7、図119-4、図120-7)、25a層で1点(図67-1)出土している。図116-7は石理に沿って剥離した剥片を素材とし、分割面を平坦打面として、石理

に沿って剥片を剥離している。剥片剥離途中、あるいは剥片剥離終了後に両極打撃によって石核を縦方向に分割しており、剪断面（d面）を形成している。図119-4は素材を明らかにしにくい、側縁に残る自然面から、石理に沿って剥離した盤状剥片を素材にしていると考えられる。そして、側縁に残る自然面を打面として石理に沿って剥片を剥離している。剥片剥離作業終了後に両極打撃によって石核を分割しており、剪断面（b面）を形成している。図120-7は石理に沿って剥離した盤状剥片を素材とし、自然面打面を1カ所に設定し、石理に沿って剥片を剥離している。剥片剥離終了後に両極打撃によって石核を分割しており、剪断面（a面下とd面）を形成している。図67-1は厚い剥片を素材とし、その主剥離面を平坦打面として剥片を剥離している。石理との関係は明かでない。剥片剥離作業との前後関係は明かでないが、これも両極打撃によって石核を縦方向に分割し、剪断面（b面）を形成している。

以上の石核の検討から、特に、27b層上面から出土した石核には次の共通点が見いだせる。

- ・石理に沿って剥離した盤状剥片を素材とする。
- ・素材の側縁に残った自然面、あるいは分割面を打面とする。
- ・剥片剥離は石理に沿った方向に行う。
- ・剥片剥離作業途中、あるいは剥片剥離作業終了後に石核自体を縦方向に分割している。

なお、石核の分割面については、意図的な石核の分割よりも楔形石器に転用した結果生じた可能性もある。ただし、以上の石核はすべて剥片剥離が終了して破棄されたもので、ここに復元したことは剥片剥離の最終段階の工程である。

(2) 剥片の検討

今回出土した安山岩の剥片には打面が線状に潰れたものが多く認められた。今回検討した石核の中にはそのような打面を持つものはない。これに対し、楔形石器の縁辺は線状に潰れていることが大きな特徴であり、そこから剥離される剥片は打面が線状に潰れていることが考えられるため、打面が線状に潰れているものは楔形石器の削片として分類した。ただし、このように楔形石器の削片とそれ以外の剥片の区別は打面形態によっているため、打面が欠損しているものは剥片か楔形石器の削片か区別ができないものが多い。したがって、打面が残っており、明確に剥片と判断できるものを検討の対象とした。27b層上面出土の剥片が53点、25a層出土の剥片が16点の合計69点である。

剥片の大きさを図188に示す。長さ1～3cm、幅1～5cmの範囲に分布するものが多い。長さ4～5cm、あるいは幅5～7cmの比較的大きな剥片も少数存在する。全体としては、若干横長という以外に一定の形態を示していない。次に厚さを図189に示す。4mmと9mmに2つのピークがある。これは先にみた剥片の大小に対応している。

打面形態を図190に示す。自然面打面が過半数を占め、平坦打面がこれに次ぐ。自然面打面の

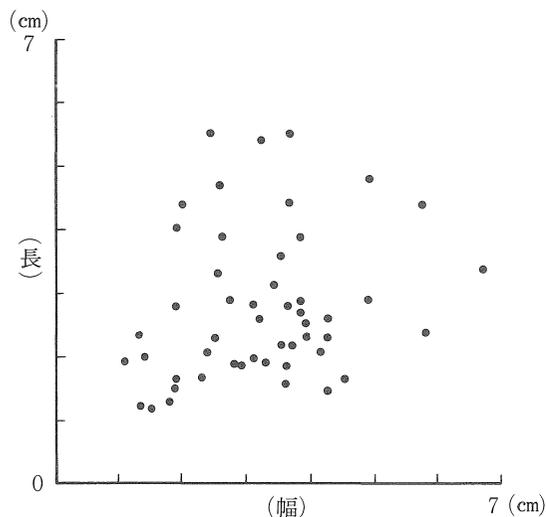


図188 27 b、25 a 層出土剥片の長幅比

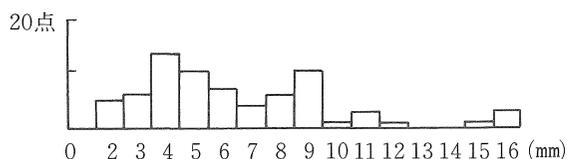
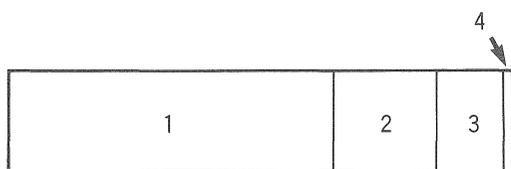


図189 27 b、25 a 層出土剥片の厚さ



剥片の打面形態

1 : 自然面打面	45点	64.2%	3 : 粉碎打面	9点	13.0%
2 : 平坦打面	14点	20.3%	4 : 点状打面	1点	1.4%

図190 27 b、25 a 層出土剥片の打面形態

観察から、すべての剥片は石理に沿って剥離されていた。平坦打面の観察では、打面が剥片の背面を切るものは認められなかった。したがって、交互剥離が存在した可能性はかなり低いと考えられる。打面形態と剥片の大きさ、厚さの間には相関関係は認められなかった。また、打面が粉碎しているものや打面が点状になるものがわずかに認められたが、図119-4の石核では、打面の縁辺で粉碎している部分があり、打面の縁辺部を加撃した場合、剥離される剥片の打面が粉碎したり、点状にしか残らない場合が考えられる。しかし、こうした剥片は少なく、イレギュラーなものであると考えられる。

背面の剥離方向を検討する。図191に示したように、剥片の打面を上にして8方向を設定した。その剥離方向を図化したものが図192である。A方向、すなわち主剥離面と同じ方向からの剥離が多いことがわかる。このことから、剥片剥離は基本的に1つの打面から行い、打面転移はあまり行わなかったと考えられる。

自然面の残存状況は次の通りである。打面に残すもの43点(62.3%)、表面に残すもの9点(13.0%)、側面に残すもの3点(4.3%)と全体の79.6%が自然面を残している。また、表面全体が自然面にお

おわれているものは極めて少ないことから、安山岩が原石の状態で搬入されている可能性は考えられないであろう。

以上のことから、これらの剥片は自然面打面、あるいは平坦打面を持つ石核から、石理に沿って剥離されたと考えられる。こうした特徴は、上記の石核が持つ特徴とほぼ一致しており、

上記のような石核から剥離されたと考えられる。

(3) 剥片剥離技術の復元

石核と剥片の属性の検討から次の剥片剥離技術が復元できる。

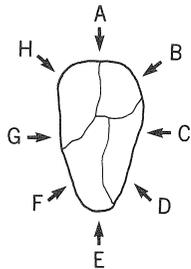
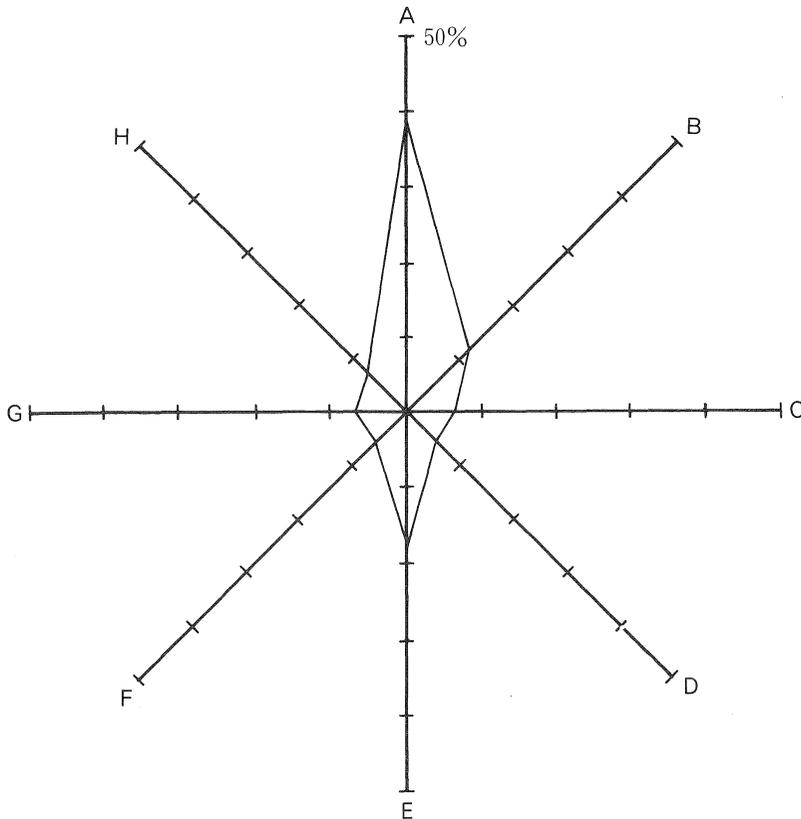


図191 剥片の背面の剥離面構成

- ① 側縁に自然面や分割面を残し、石理に沿って剥離した盤状剥片を石核の素材とする。
- ② 素材の側縁に残った自然面、あるいは分割した面を打面として、1つの打面から剥片を剥離する。打面転移は多くなく打面調整は行わない。
- ③ 剥離される剥片は若干横長となるが、一定の形態を示さない。そして、石理に沿って剥離されるため、打瘤は発達せず、主剥離面は平坦面に近くなる。



背面の剥離方向			
A 39.1%	C 6.3%	E 17.2%	G 7.0%
B 11.7%	D 4.7%	F 6.3%	H 7.8%

図192 27 b、25 a 層出土剥片の背面の剥離方向

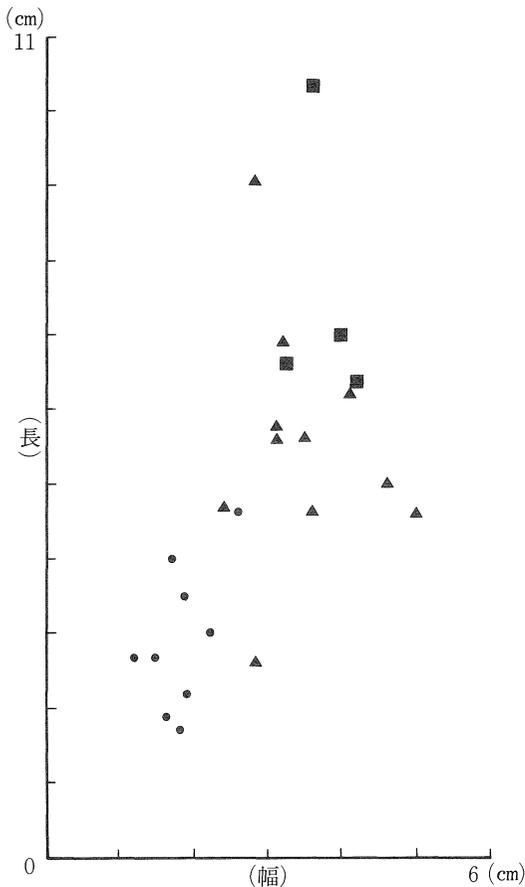
以上はあくまでも剥片剥離の最終段階の剥離であり、初期の段階での剥片剥離技術や打面転移などについてはこれらの資料では復元できない。

このように、金山産安山岩の強い石理に支配された剥片剥離技術が復元できる。これは竹広文明氏が縄文時代剥片石器の研究の中で剥片剥離技術Ⅲ⁽²⁸⁾としたものに酷似している。この剥片剥離技術は竹広氏が洗谷貝塚で認めたもので、板状石材を使用し、その側縁に打面を設定し、石理に沿って剥片を剥離するものである。こうした技術は岡山県海岸沿いの縄文時代後・晩期の遺跡では一般的に認められる剥片剥離技術であるとされている。

5 剥片石器の製作技術

(1) 石 鏃

石鏃は未製品であっても調整が進んでおり、素材面、特に素材の打面を残さないものが多く、



●：石鏃(未製品を含む) ▲：スクレイパー ■：打製石鏃

図193 27b、25a、23層下面出土石器の長幅比

素材を推定できるものは少ない。図114-6の未製品が自然面打面の剥片を素材にしており、図120-3の打面が潰れていることから、楔形石器の削片を素材にしていることが推定できる程度である。そこで、大きさから素材を推定することにする。石鏃とその未製品の大きさを図193に示す。長さ2～4cm、幅1～2cmのところに分布する。厚さの平均は4.4mmである。この大きさの剥片は図188に示したように多く存在しており、これらの剥片が素材になったことは十分考えられる。栄一郎氏は津島岡大遺跡第2次調査で出土した縄文時代晩期の資料を分析した結果、明確に石核として認定できる資料が存在しないこと、楔形石器とその削片が多く存在することなどから、楔形石器が石核としての機能を持っており、その削片が石鏃の素材になっていた

可能性を考えている。⁽²⁹⁾ 今回出土した楔形石器の削片の大きさと厚さを図194、図195に示す。点数が多いため、27b層上面出土ものと25a層出土のものにわけた。大きさ、厚さともに剥片よりも齎一性が高い傾向があり、また、25a層出土のものの方が小型であることが指摘できる。ともに大きさ、厚さから、楔形石器の削片も十分に石鏃の素材になると考えられる。素材としての適性は、剥片のうちほぼ80%が自然面を残しているのに対して、楔形石器の削片は自然面を残すものは14.6%にすぎない。石鏃の中には、自然面を残すものはほとんどないことから、むしろ剥片よりも楔形石器の削片の方が石鏃の製作には適していたのではないだろうか。そもそも石鏃には、図66-3のように加工が進んで素材面をほとんど残さないものから、図113-6のように薄い素材の周縁のみを加工しただけで大きく素材面を残したまま先端部が形成され、完成品とみなし得るものが認められる。このことから、石鏃は最終的には一定の形態が求められ

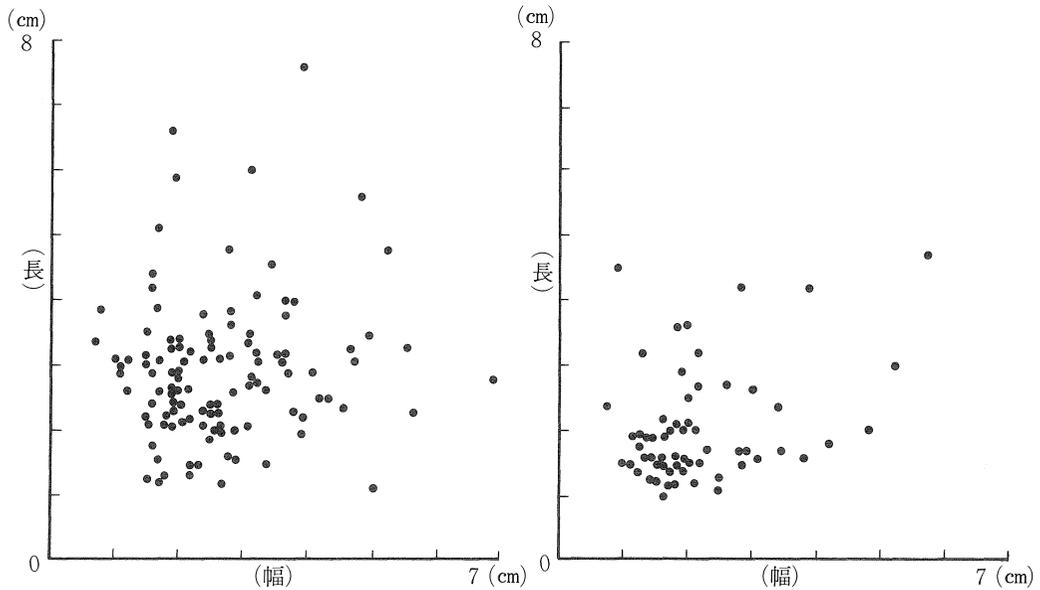


図194 楔形石器削片の長幅比 (左：27b層、右：25a層)

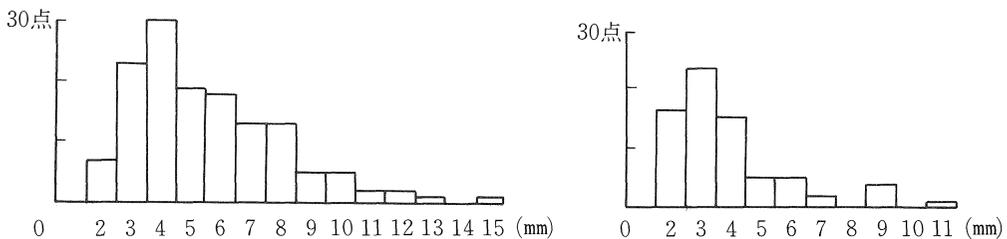


図195 27b、25a層出土楔形石器削片の厚さ

るが、加工量を調節することで素材の形態から受ける制約を軽減できるため、実際にはさまざまな素材があり得たと考えられる。

以上のことから、今回の検討では、剥片、楔形石器削片の両者が石鏃の素材になりえた可能性を考えておきたい。

(2) スクレイパー類

ここでは石匙を含めてスクレイパー類と呼ぶことにする。スクレイパー類はすべて周縁のみの加工にとどまっており、両面に大きく素材面を残している。そして、一定の形態を示さない。スクレイパーの大きさを図193に示す。剥片や楔形石器の削片の大きさ(図194、図195)と比較してみるとほとんどが今回出土した剥片や楔形石器の削片よりも大形である。そして、今回出土した剥片、楔形石器の削片の中ではスクレイパー類の素材になり得るものは極くわずかである。それでは、スクレイパー類はこの遺跡では製作しなかった、すなわち、スクレイパー類の製品での搬入は考えられるであろうか。今回の出土石器の中には、打製石鏃の刃部片が数点認められる。それは打製石鏃の頻繁な使用を示唆するものであり、打製石鏃が刃部の消耗の激しい石器であるとはいえ、短期間の居住は考えにくいであろう。また、打製石鏃は短期間の居住生活の中では必要のない石器でもある。したがって、スクレイパー類のうち、製品での搬入があったとしても、居住期間内にそれを消耗し、新たなスクレイパーを製作する必要はあったと考えられる。このことから、この遺跡内でもスクレイパー類を製作していたと考えたい。

以上の検討から、スクレイパー類の素材は剥片剥離作業の初期に剥離された大形の剥片を素材としており、その大型剥片を無駄なくスクレイパー類に加工したと考えられる。大形の剥片を無駄なく使用することと加工量の少なさがスクレイパーの形態の多様性につながっているであろう。それは、スクレイパーは刃部の形成は求められるが、一定の形態は求められていなかったからであると考えられる。

(3) 打製石鏃

打製石鏃は縄文時代後期になって出現する大形石器で、しばしば刃部に摩滅痕が認められることから、刃部を激しく消耗する石器として、地面を掘り起こすような機能が推定されている。農耕の開始とからんで興味もたれている石器である。

打製石鏃は27b層上面で5点、25a層で1点、23層下面で4点出土している。27b層上面出土のものは1点をのぞき搬入した安山岩製であるが、25a層、23層下面出土のものは全て結晶片岩やホルンフェルスといった地元で入手可能な石材を使用している。これは、楔形石器の削片の大きさが、25a層出土の方が小型であることも考え合わせると、安山岩の搬入量の差によることが考えられる。ここでは、27b層上面出土の安山岩製の打製石鏃について検討する。

加工が進んで素材面をあまり残さないもの(図115-2)と加工が周縁部にとどまり、両面に

大きく素材面を残すもの(図115-1、図118-1)の両者が認められる。残された素材面から、大形の剥片を素材にしていることが考えられる。打製石鋸の大きさを図193に示す。出土剥片、楔形石器削片の大きさ(図194、図195)と比較すると、打製石鋸の素材になり得るようなものはほとんどないことがわかる。加工が進んでいるものや欠損しているものはさらに大きな素材であったことを考えると、今回検討した資料の中には、打製石鋸の素材になるような剥片、削片は存在しないことになる。後に周辺の遺跡の状況から大形剥片石器の素材獲得に言及するが、ここではスクレイパー類と同様に、剥片剥離の初期の段階で剥離された大形の剥片を素材にしたことを推定するにとどめる。

(4) 楔形石器

楔形石器については、製作という概念は適当ではないであろう。楔形石器は旧石器時代から弥生時代まで一貫して存在していながら、型式変化を示さず、一定の形態も示さない。これは楔形石器の形態は意図された形態ではなく、使用の結果形成されたものであるからに他ならない⁽³⁰⁾。今回出土した資料の中でも、打製石鋸の刃部片を再利用した楔形石器(図118-5)や石核を楔形石器に転用したと考えられるもの(図119-4)、スクレイパーを楔形石器に転用したと

考えられるもの(図120-5)が存在するように、素材は様々であると考えられる。

今回出土した楔形石器は偏平状のものと角柱状のものに分けられる。それらの大きさを図196に示す。厚さの平均は、偏平状のもので8.2mm、角柱状のもので13.6mmである。偏平状のものは通常の剥片から十分に形成し得るもので、基本的には小型の剥片素材であると考えられる。これに対して、角柱状のものは偏平状のものに比べると若干大形で、さらに厚さの点では偏平状のものよりはるかに厚い。厚さの点でこれに対応する剥片はほとんど出土していない。剥片剥離初期の段階の大形剥片を素材としたのであろうか。また、角柱状の楔形石器は、厚さの割には平面形はさほど大きくないことから、当初はもっと大きなものであり、後に分割されて形成されたことが考えられる。

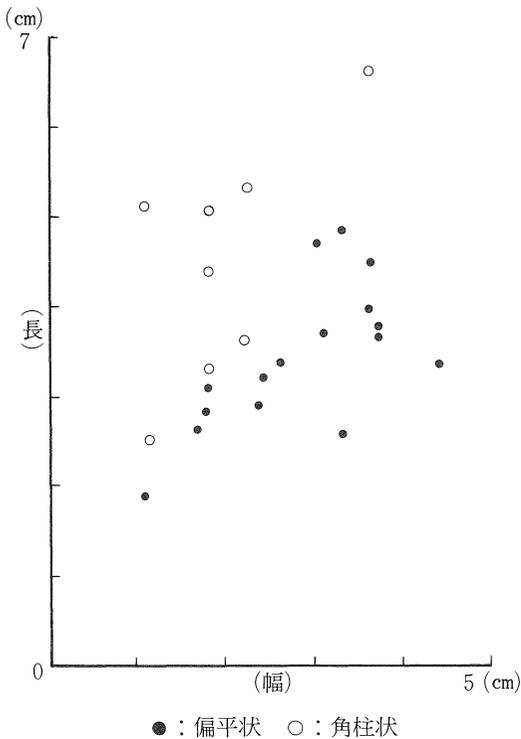


図196 27b、25a層出土楔形石器の長幅比

ここで、楔形石器の素材を今一度検討してみる。他の地点で出土した楔形石器も含めて検討してみると、打製石鏃の刃部片を素材としたもの⁽³¹⁾や石核を転用したもの⁽³²⁾がいくつか認められる。楔形石器はこのように不要になった石器を素材として形成し得るものであるから、角柱状の楔形石器の素材には、必ずしも剥片剥離の初期に剥離された大形の剥片を考える必要はないであろう。そこで注目したいことは、角柱状の楔形石器は必ず剪断面を持っていることである。その剪断面の大きさの平均値は長さ42.2mm、幅12.8mmで、偏平状楔形石器の剪断面の大きさの平均値、長さ32.5mm、幅7.7mmよりも明らかに大きい。次に注目すべきことは、27b層上面で出土した石核は全て縦方向に分割して剪断面を形成している点である。石核の持つ剪断面の大きさの平均値は長さ42.0mm、幅14.8mmである。この大きさは角柱状の楔形石器の剪断面の大きさにほぼ一致する。こうしたことから、角柱状の楔形石器は、石核を剥片の剥離作業途中、あるいは剥片剥離作業を終えた後に分割した結果、形成されたものであると考えられる。

なお、栄一郎氏は津島岡大遺跡第2次調査で出土した資料の分析から、楔形石器に石核としての機能を考えている⁽³³⁾。今回検討した資料では先に示したように、楔形石器の削片が石鏃の素材になった可能性を示したが、その一方で、両面が素材面におおわれ、石鏃の素材になるような削片を剥離していないもの(図115-3～8など)や、明らかに石鏃よりも小さな楔形石器(図118-8、図120-8)が存在することから、削片を石鏃の素材として用いたことはあくまでも2次的なもので、楔形石器には本来は別の機能があったと考えたい。たとえば、獣骨から骨髓を取り出すために、獣骨を縦割りにするような機能である。

(5) 技術構造

以上の検討から、津島岡大遺跡第5次調査で出土した縄文時代後期石器群の技術構造の復元を試みる。

今回の調査では、安山岩の搬入形態を直接推定させるような資料は出土していない。縄文時代晩期の層から盤状剥片が出土していることや、周辺の遺跡での搬入状況から、盤状剥片の状態で搬入したことを推定するにとどまった。

今回の資料では石核を製作する工程については検討できる資料がなく、全く不明であった。洗谷貝塚の資料の中には、盤状剥片を全く加工せずに周縁の自然面に打面を設定し、そのまま剥片剥離を開始していると思われる資料がある。また、今回検討した石核の中には剥片剥離の途中で石核を分割し、さらに剥片剥離を続行していると考えられる資料(図116-7)も存在する。また、剥片剥離の初期の段階についても検討できる資料がなく、ほとんど不明であった。そこで、周辺の遺跡での状況から、初期における剥片剥離の一端を探ってみたい。

先述したように、百間川沢田遺跡高縄手B地区では縄文時代晩期の石器の集積土壌が2基発見されている(図197)。集積土壌1として報告された土壌からは盤状剥片状の石核1点(図197

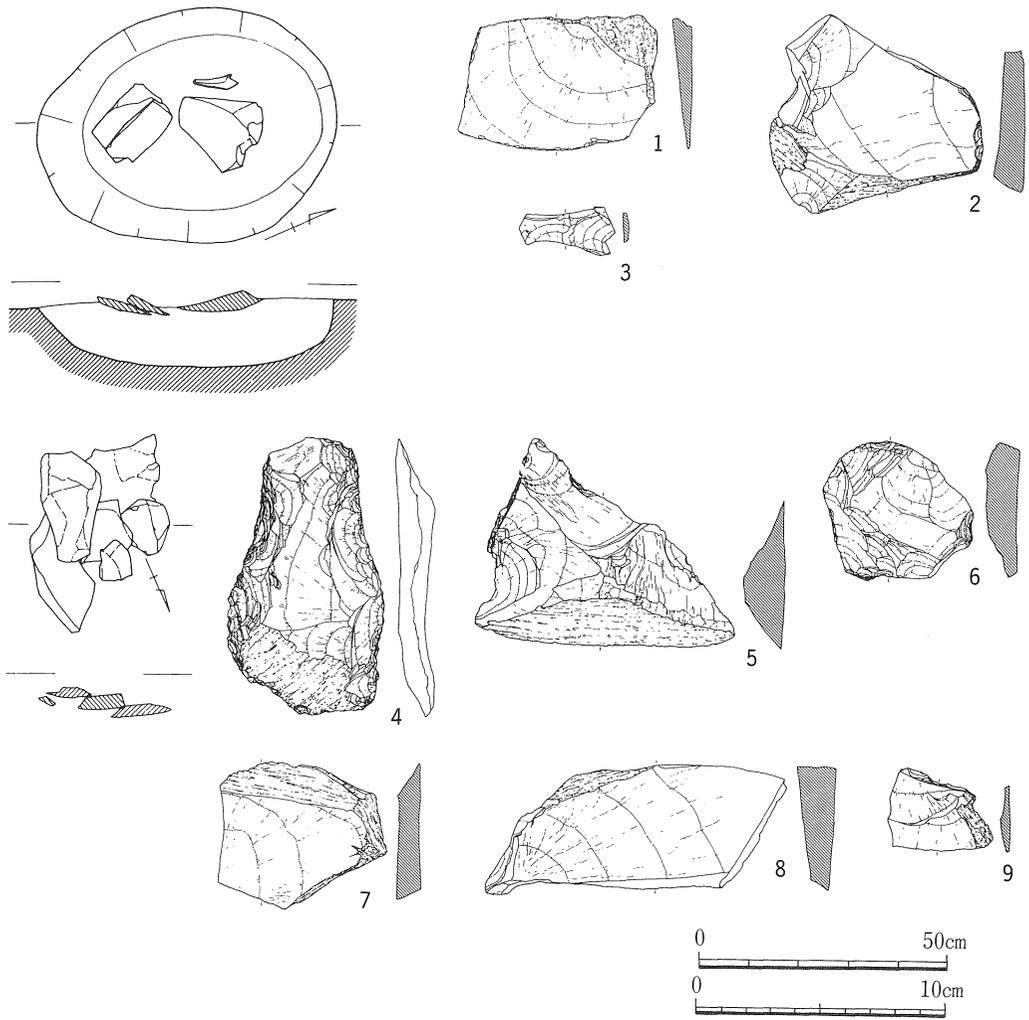


図197 百間川沢田遺跡の石器集積土壌と出土石器（注17より）

上のスケールは土壌実測図、下のスケールは石器実測図に対応する。

-2)、石包丁状削器1点、スクレイパー1点(図197-1)、剥片1点(図197-3)が出土している。集積土壌2として報告された土壌からは盤状剥片2点(図197-7、8)、盤状剥片状の石核2点(図197-5、6)、打製石鋏1点(図197-4)、剥片1点(図197-9)が出土している。時期は下って弥生時代中期になるが、用木山遺跡では、住居址内から盤状剥片3点、打製石包丁1点が出土している。百間川今谷遺跡では同じく弥生時代中期の土壌から、盤状剥片1点と打製石包丁3点が出土している。このように、盤状剥片あるいは盤状剥片状の石核は打製石鋏、打製石包丁といった大形の剥片石器とセットになっての出土例が目立つ⁽³⁴⁾

ここで、盤状剥片の集積で有名な洗谷貝塚との比較をしてみる。先に示したように、金山産

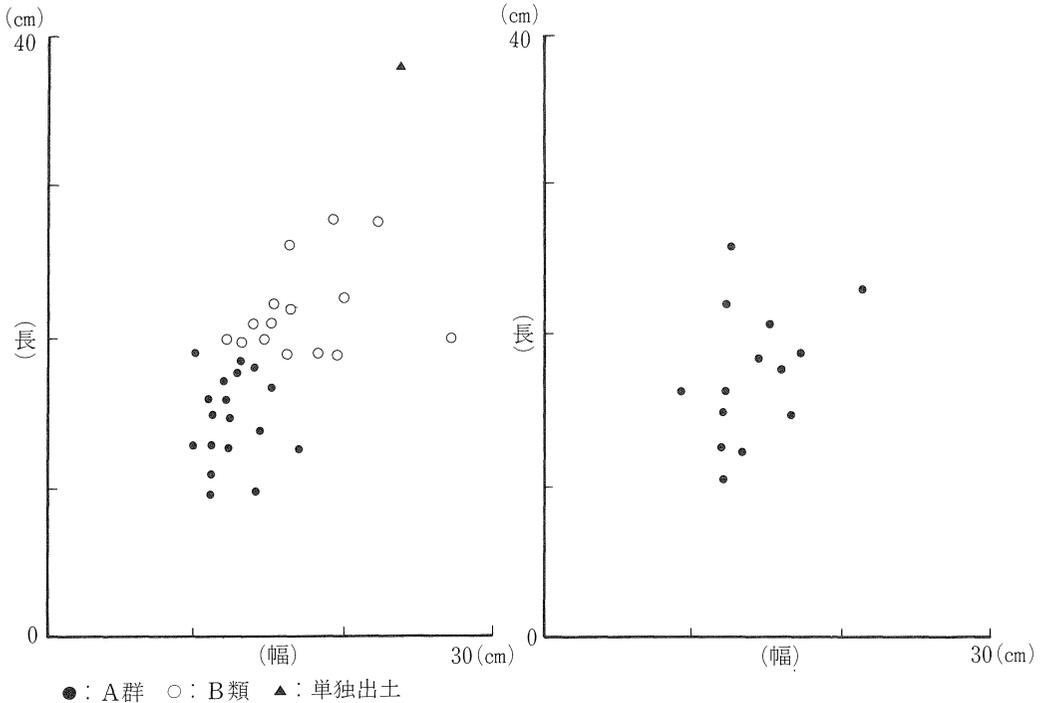


図198 盤状剥片の長幅比 (左：洗谷貝塚、右：他の遺跡)

の安山岩は一度洗谷貝塚のような拠点的な遺跡に集積された後に他の遺跡に持ち出されたと考えられている。洗谷貝塚では2ヵ所に合計34枚の板状の石材が集積された状態で出土している。図に示したように、2ヵ所の集積は、石材の大きさに明らかな違いがある。小さい方の1群をA群、大きい方の1群をB群として報告されている。これと他の遺跡（百間川沢田、帝釈峡遺跡群、用木山遺跡、百間川今谷遺跡）から出土した盤状剥片の大きさを比較すると（図198）、大きさの点では、洗谷貝塚で出土している石材とほとんど変わりはない。次に厚さを比較すると、洗谷貝塚出土のものはA群の平均34mm、B群の平均37mmと平面的な大きさは違うが、厚さはほとんど変わりはない。平面的な大きさよりも一定の厚さが求められたことが推定できる。これに対し、上記の遺跡で出土したものは、厚さの平均25.6mmであり、大きさの点では洗谷貝塚出土の盤状剥片とほとんど変わりはないが、厚さは1cmほど薄くなっている。重量では、洗谷貝塚の石材の平均重量は1330.8gであるのに対し、上記の遺跡で出土した盤状剥片の平均重量は688.0gと、642.8g軽くなっている。一緒に出土した大形石器の平均重量が576.0gであることを考え合わせると、各遺跡に搬入した盤状剥片から、まずは打製石鋏や大形のスクレイパーといった大形石器に使用する剥片を確保した後に、残った石材から他の石器用剥片の剥離を開始していたことが考えられる。さきに洗谷貝塚の盤状剥片を検討し、平面的な大きさよりも一

定の厚さが求められていたことを推定したが、これは、剥片剥離初期の段階で石理に沿って大形石器の素材を確保することが前提としてあったからと考えられる。

このように、スクレイパー類や打製石包丁といった大形の剥片石器は、やはり初期の段階で盤状剥片から確保した石材で製作されたものであると考えられる。そして、大形の剥片石器用の石材を確保した後に残った石材から剥片を剥離し、小型のスクレイパー、石鏃などを製作したと考えられる。そのときの剥片剥離技術は、石核の側縁部に残った自然面を打面として基本的に1つの打面からは、石理に沿って剥離するものであった。そして、剥片剥離途中、または剥片剥離を終了後に石核は分割して角柱状の楔形石器として使用されたと考えた。

以上の検討から、津島岡大遺跡第5次調査で出土した縄文時代後期石器群からは図199のような構造が復元できる。

最後に、技術構造の一端として、大型石器の他器種への転用に言及する。安山岩は搬入石材であるから、その効率的な消費のしかたとして、大型石器がその機能を失った後に、例えば、石核に転用して小型の石器の製作にあてるようなことが考えられる。今回検討した津島岡大遺

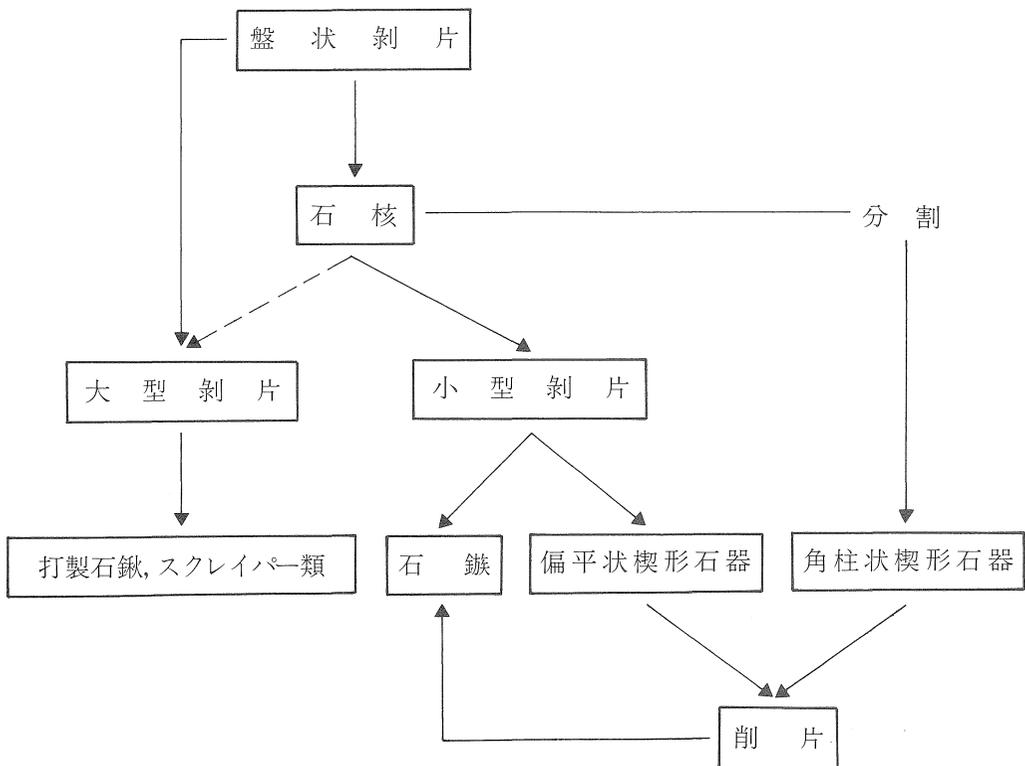


図199 津島岡大遺跡第5次調査出土の縄文後期石器群の技術構造

跡第5次調査の資料では、打製石鋏の破片を楔形石器に転用しているものが1点だけみられた。しかし、在地石材で製作した打製石鋏はしばしば多量に出土する⁽³⁵⁾のに対し、搬入石材で製作した打製石鋏は数点単位でしか出土しない背景には、他器種への転用の可否にあるのではないだろうか。今回検討した資料では検討しきれないが、大いに考えられる可能性として、また、今後の課題として指摘しておく。

6. 縄文時代後・晩期における位置づけ

今回検討した石器群の縄文時代における位置づけを考える。中国地方における縄文時代の石器群の技術的な検討は竹広氏によってなされている⁽³⁶⁾。これによれば、中国地方では、縄文時代後期になると石器製作技術に1つの画期が認められるという。すなわち、縄文時代中期には、金山産の盤状剥片を使用しながらも交互剥離によって剥片を剥離しているが、縄文時代後期になると、金山産の安山岩の強い石理を利用した剥片剥離技術がみられるようになる。今回検討した石器群は安山岩の強い石理を利用した剥片剥離を行っており、縄文時代後期の一般的な剥

片剥離技術の中で理解できる。また、石器組成の点でも、石匙の減少、打製石鋏の出現といった縄文時代後期の一般的な石器組成を示している。

こうした中で、今回検討した石器群の特徴をあげると、石核の少なさ、打製石鋏の多さといったことがあげられる。この要因は沖積地という立地条件も合わせて検討しなければならない。石核が少ない点は、栄一郎、絹川一徳両氏によって安山岩の搬入量の少なさによるものとして、安山岩搬入量の遺跡間での格差という重要な問題を示唆している⁽³⁷⁾。今回の検討で、石核は最終的には楔形石器として利用されており、角柱状を呈する楔形石器がこれにあたると考えた。こうした石核のありかたが他の遺跡でどのように認められるかを検討しなければならないが、大型の盤状剥片を出土している広江・浜遺跡では、筆者が実見した範

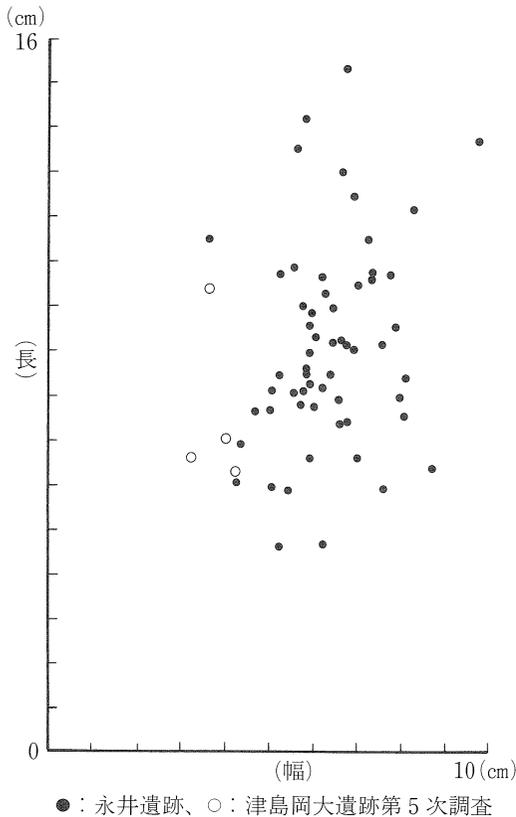


図200 打製石鋏の長幅比

囲では角柱状を呈する楔形石器が認められないことから、沖積地という、縄文時代後期になって新たに進出した土地での搬入石材の不足から生じた現象かもしれない。27b層上面では安山岩製の打製石鋏が4点出土しているが、石材に恵まれた永井遺跡のものに比べると小型である(図200)ことや、25a層、23層下面では、石材を大量に消費する打製石鋏が地元で入手可能な石材で製作している現象も搬入石材の不足を物語るものであろう。

ここで縄文時代後期における安山岩の流通システムを考えてみると、原産地である香川県金山から、一度洗谷貝塚のような拠点遺跡に集積され、そこから他の遺跡に搬出されていたことが考えられている。搬入石材の集積が形成される要因は次のように考えられる。

当時の石器製作は金山産の安山岩という、局地的にしか産出しない石材を使用する。したがって、遺跡の立地には原産地からの距離が重要な決定要素となり、石材の運搬労力が少ない所に立地することが考えられる。縄文時代後期には帝釈峡遺跡群のような山間部の遺跡でも、安山岩は盤状剥片の状態出土していることから、交易によって、石材が消費されることなく集団間を移動していたことが考えられる。しかし、各集団は石材を消費しながら生活するわけであるから、自己集団の消費分以外の余剰石材がなければ交易による石材移動はありえない。したがって、各集団内での入手石材の総量中にしめる、石材の自己消費量の割合は余剰石材の運搬労力に換算して考えることができる。原産地から離れるに従って、入手できる石材の総量も減少していくであろう。すると、入手石材総量中にしめる自己消費量のしめる割合も高くなる。したがって、石材の運搬労力も高くなると考えられる。この考え方を逆に考えると、石材の運搬労力を最小にするには、石材の原産地に近いところに立地するか、入手した石材を消費することなく運搬できるところに立地することが考えられる。入手石材を消費することなく運搬する手段には、海上運搬が考えられる。海上で石器を製作し、それを消費したとは考えられないから、海上運搬によれば、石材を消費することなく、しかも大量の運搬が可能である。洗谷貝塚にみられる大量の石材の集積は、このような瀬戸内海の海上運搬によって可能になったことなのである。また、そこに集積することで、海上移動にともなう危険をできるだけ回避することもできる。海面が低下し、瀬戸内海が陸地化していた旧石器時代とは根本的に異なる石材流通システムである。

縄文時代後・晩期の津島岡大遺跡はこの流通システムのどこに位置づけられるであろうか。この遺跡は、それまで未開発であった沖積地に進出した遺跡であることや、実際の出土遺物の量などから、地域の拠点集落であったとは考えにくい。あくまでも分村的な性格が考えられ、安山岩の流通システムでは末端に位置していたことが考えられる。石材が十分には行き渡らなかった原因もこうしたところに求められるであろう。

石材の流通システムの末端に位置しながらも、当時の石器組成を装備し、剥片剥離の終了し

た石核を楔形石器に転用するなど、石材不足に適応できる技術構造を保持し、この時期に新たに進出した沖積地に立地するという点で、縄文時代後・晩期における遺跡あり方の1例であるという評価ができるだろう。

7. 今後の課題

今回は縄文時代後・晩期における津島岡大遺跡第5次調査出土の石器群の位置づけの考察にとどまったが、縄文時代後・晩期は縄文時代の中でも1つの重要な画期をもつ時期であり、農耕の開始を考える上でも近年注目を集めている。石器研究はこうした問題を解明する一手段として非常に有効である。例えば遺跡ごとの石器群の比較研究の必要がある。遺跡の立地によって、石器組成、技術構造の細部に違いがあると思われる。また、こうした観点で縄文時代中期との比較も必要である。縄文時代中期と後・晩期では石器組成、石器製作技術に明かな違いがある。この違いの説明がされなければならない。また、縄文時代後期に出現する打製石鍬、大型スクレイパーの研究も必要である。特に、これらの刃部に特徴的にみられる摩滅痕の形成要因の研究は、石器の機能を解明し、生業の変化を明らかにする上で非常に重要な研究である。このように、石器研究1つを取ってみても未解決の基本的な問題点が多くある。こうした諸問題を解明した上で縄文時代後・晩期の石器群を評価することが重要であろう。

最後になりましたが、本校を作成するにあたって次の方々には、資料収集などで大変お世話になりました。記して厚くお礼申し上げます（敬称略、五十音順）。

鈴木茂之、鈴木康之、園尾裕、竹広文明、平井勝、間壁忠彦

（富樫孝志）

注

- 1 戸沢充則「先土器時代における石器研究の方法—考古学的な資料を歴史的な認識の素材とするまでの、整理と理解の過程に関する方法論への試みとして—」『信濃』第17巻第4号 1965年
- 2 稲田孝司「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』第15巻第3号 1969年
- 3 鈴木次郎「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現—相模野第Ⅳ期石器群の構造的な理解—」『神奈川考古』第22号 1986年
- 4 絹川一徳「国分台遺跡における石器製作の技術構造—原産地遺跡間の比較を通して—」『考古学研究』第35巻第1号、第2号 1988年
- 5 麻柄一志・古森政次「土坑1の剥片生産技術—縄文早期の石器群の分析—」『二上山・桜ヶ丘遺跡—第1地点の発掘調査報告—』奈良県教育委員会 1979年など
- 6 山田昌久「縄文時代における石器研究序説—剥片剥離技術と剥片石器をめぐって—」『論集日本原史』吉川弘文館 1985年など
- 7 竹広文明「中国地方縄文時代の剥片石器—その組成・剥片剥離技術—」『考古学研究』第35巻第1号 1988年
- 8 山崎純男「西日本後・晩期の農耕」『縄文文化の研究』第2巻 雄山閣 1983年

- 9 平井勝「第三章 縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- 10 栄一郎「石器類の分析」『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ』岡山大学埋蔵文化財調査室 1986年
- 11 間壁志彦・間壁葎子編「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 倉敷考古館 1979年
- 12 小都隆「洗谷貝塚」福山市教育委員会、福山市文化財協会 1976年
- 13 渡部明夫編「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第九冊」香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団 1990年
- 14 間壁志彦・間壁葎子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 倉敷考古館 1968年
- 15 石鏃に関しては遺跡の立地によって、減少しない遺跡もあり、例えば、山間部に位置する権現谷岩陰遺跡では40点の石鏃が報告されており、それらのうち多くは縄文時代後期であると考えられている。(近藤義郎・宇垣匡雅編『権現谷岩陰遺跡』川上町教育委員会 1983年)
- 16 中越利夫「縄文時代後期の瀬戸内—打製石器を中心として—」『考古論集—潮見浩先生退官記念論集—』潮見浩先生退官記念事業会 1993年
- 17 平井勝編「百間川沢田遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 1993年
- 18 白石純「サヌカイト製石器の産地について」『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 1993年
- 19 鎌木義昌・東村武信・薬科哲夫・三宅寛「黒曜石、サヌカイト製石器の産地推定による古文化交流の研究」『古文化財の自然科学的研究』同朋社 1984年
- 20 注12参照
- 21 注12によれば、周辺の大門貝塚、大田貝塚、中島丹花遺跡などで盤状剥片が出土しているようである。
- 22 竹広文明「縄文時代の石器原材獲得—金山産サヌカイトをめぐる—」『考古論集—潮見浩先生退官記念論集—』潮見浩先生退官記念事業会 1993年
- 23 小野昭「5 石器の生産」『岩波講座日本考古学』第3巻 岩波書店 1986年
- 24 注17参照
- 25 本稿では、栄一郎氏による弥生時代の石器研究などから、縄文時代後期以後、弥生時代まで石器製作技術は基本的には変わらないという認識のもとに論を進めている。(栄一郎「5 サヌカイト遺物の分析」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988年)
- 26 高畑知巧編「百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 岡山県文化財保護協会 1982年
- 27 神原英朗編「用木山遺跡」岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(4) 山陽町教育委員会 1977年
- 28 注7参照
- 29 注10参照
- 30 こうした理由から、技術形態学の立場では、楔形石器は通常の石器とは認めない傾向にあるようである。
- 31 打製石鏃の刃部片を再利用したものは、今回出土した資料の中に数点認められる他、注10で栄氏が検討した、津島岡大遺跡第2次調査の出土資料中にも数点認められる。
- 32 石核を転用したものは、山本悦世編『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992年のp. 87、第69図のs34がある。
- 33 注10参照
- 34 縄文時代の石器集積のあり方は、洗谷貝塚の盤状剥片の集積や桑飼下遺跡(渡辺誠編『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 1975年)の打製石鏃の集積のように、特定器種だけを集積する仕方がよくみられるが、この考え方からすると、盤状剥片と大型石器というの組み合わせも再検討の必要がある。すなわち、盤状剥片と一緒に埋納された大型石器は、既に本来の機能を失い、石核あるいは石材として集められた可能性も考えられるが、これを検討すると本稿の主旨からはずれるので、これ以上の検討は控えておく。
- 35 谷尻遺跡(高畑知巧ほか「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11岡山県教育委員会 1975年)や桑飼下遺跡が

調査の成果と課題

その好例である。

36 注7参照

37 注10及び、絹川一徳・富樫孝志「c 石製品」『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992年参照

総 括

約1500m²の調査範囲から出土した遺構や遺物は、当初の予想をはるかに上回る質と量をもっていった。この成果は発掘調査の終了した段階にその概要を報告をしたが、本報告の刊行にむけての約2年間の本格的な整理作業と分析により、縄文時代後期以降の津島地区の地形変遷と遺跡形成のありかたを良く示す豊富な情報を我々にもたらした。

遺跡から発見された遺構や遺物を多角的に分析した個々の成果については、第Ⅳ、Ⅴ章において各論というかたちで掲載した。ここでは、いくらかでもそうした成果の相互の関連に目をくばり、遺跡の形成された時代と地域の特性、および今後の課題についてまとめて総括としたい。

今回の調査範囲内からは豊富な質と量をもつ縄文土器が出土した。それらは整理の段階で、第Ⅰ群からⅣ群に分類された。この中でも主体を成すものは第Ⅳ群土器とされたものである。その特徴は中部瀬戸内地域では今まであまり知られておらず、またこれらの土器に関東地方の堀之内2式や加曾利B1式や、その影響を受けた土器が共伴した。この事実は、土器型式の広域な編年整備に良好な事例を蓄積したということに止まらず、この時期に関東地方までを含む広域に取り結ばれた地域間の関係が存在したことを示唆する。さらに深鉢B類とされた器種の文様の成立に豊後水道付近の土器の影響が見られる点は、第Ⅳ群土器の成立の背景にある複雑な地域間の関係をしめすものであろう。

こうした土器群の型式学的な特徴とともに、これらの製作技術や機能を明らかにするという観点から、土器の器種組成と使用痕跡、胎土の粒度分析をおこなった。これらの分析は、こと縄文土器においては未だ分析事例が少なく、今の段階では比較資料に恵まれないが、深鉢や浅鉢を主体とした豊富な器種の多くに二次的な被熱の痕跡が観察され、また胎土の粒度分析からは、これらの薄手の土器が粗い鉱物粒子を混和材として混入した胎土により作られていた特徴があきらかにされた。複雑な形態と煮沸を主とした機能をもつ、これらの土器をもちいた調理の対象は何であったのか、動植物の遺存体に恵まれない遺跡の多いなかにあって、今回の調査はそうした問題について、いくらかでも接近できる貴重な発見があった。

縄文時代の河道に面する傾斜面に構築された7基の後期の貯蔵穴からは、量や種類の差はあれ、各種のドングリ類を中心とした植物種子が発見されている。多くの貯蔵穴の底面からはドングリやトチといった堅果類の出土がみられたので、これらを水漬けにして貯蔵した施設とも考えられる。貯蔵穴内からは堅果類の他にも多くの種類の小型種子が発見された。これらの中には、水田雑草が含まれており、縄文人の湿地を中心とした活動を考える際の注目すべき資料を提供した。また土器内面に付着した炭化物の同定により、堅果類とともに、ユリやノビルなどの鱗茎類を食料として加工していたという事実が明らかになった。

27b層から出土した第Ⅳ群土器の胎土中のプラント・オパール分析によれば、イネやヒエの存在を裏付ける成果が得られた点は、先の水田雑草の発見とともに、この地域の縄文人の生業形態を考える上で重要な資料を提供したといえる。水田雑草の存在は、コメをはじめとした栽培植物の管理と運用がある程度計画的に行われていた事実を暗示する。イネやヒエの発見をもって、単純にそれを一般的に認識されている農耕社会と直結して考えるのは慎重であるべきだが、以後の時代のなかで確実にその存在意義を象徴化させるイネや雑穀類の起源が、中部瀬戸内地域では少なくとも縄文時代後期中葉にまで遡る、ということは今回の分析成果からある一定の確実性をもって指摘することができるであろう。ただし、こうした栽培植物が津島岡大遺跡の縄文人達の食性の中で、どの程度のウェイトを占めていたかということが、今後に追求されなければならないもっとも重要な点であり、そこには一概にコメをはじめとした栽培植物の存在のみをもって、農耕社会と決めつけることのできない複雑な縄文文化の実態があるはずである。

いま再び津島岡大遺跡の立地や、そこから出土した生活用具に目を配るならば、石鏃や石錘などの狩猟、漁労具の安定的な保有と、石鋤と称される土掘り具の先端と考えられる打製石器が組成の主体を成すという特性が指摘できる。これらに植物遺存体の在り方を勘案して生業を復元するならば、そこには丘陵や微高地上における森林資源と、中・小河川における水産資源の活用を巧みに組み込んだ生産活動の構成が想定される。後期第Ⅳ群土器の行われた時期において、栽培植物はこうした複合した生業形態のなかの一部に組み込まれていたというのが、実態に近い理解かもしれない。

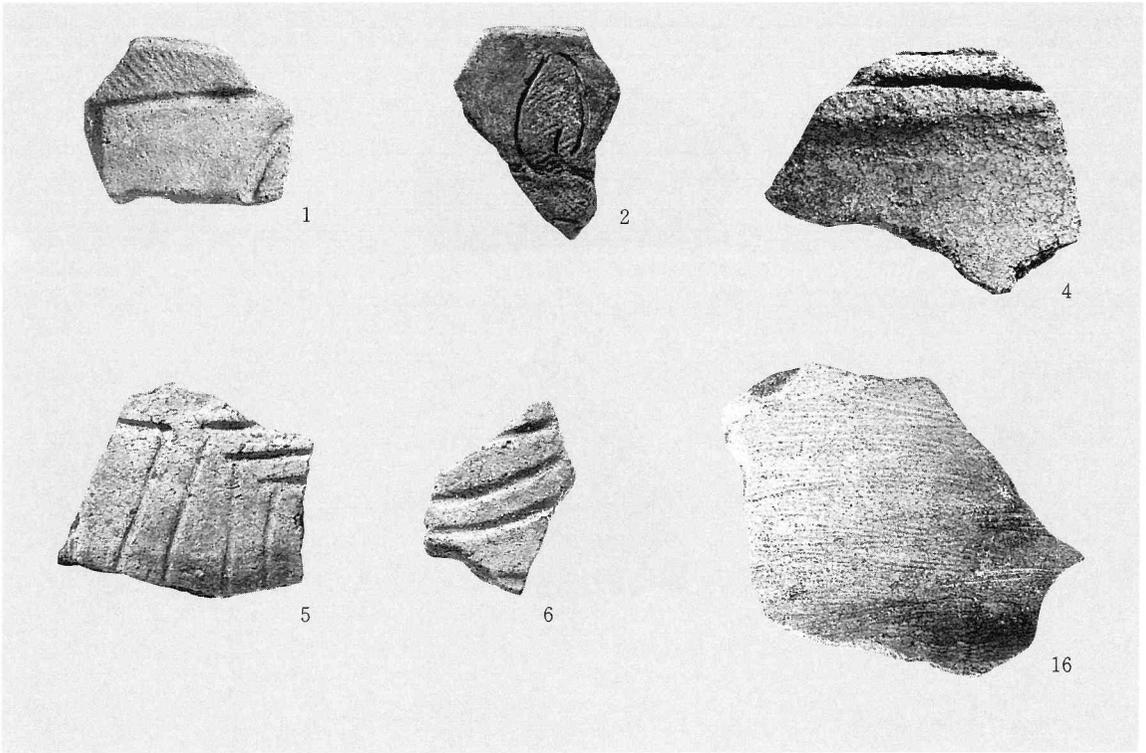
縄文時代における日本列島の森林資源に注目するならば、堅果類の採集と貯蔵や加工という作業は、各地でその技術に差はあれ、縄文時代に培われた特徴的な食物利用技術といえる。植物質食料を基調とした縄文人の食性と、それらを管理するシステムと加工技術の発達で、後の時代に栽培植物が広く定着してゆく受け皿を用意したと考えることがいまのところは説得的であろう。

また遠隔地域から搬入された石器の素材や、土器の特徴に見られた広域な地域間の関係が、かれらの生産技術の獲得や伝播、拡散という動態と全く無関係であることは考えられない。コメ情報の拡散が、いつの時期に、またいかなる契機によりおこなわれたものなのか、各地の縄文集団におけるコメや雑穀類の栽培管理の導入態勢の解明とともに、列島内そして大陸との関係を視野にいたした分析研究が今後に必要な。当面は今回の調査において確認された、イネやヒエなどの栽培植物を取り込んだ、沖積地における縄文人の生業形態の空間的な広がり、その形成の過程が、今後追求されなければならない縄文時代研究の重要な課題となろう。

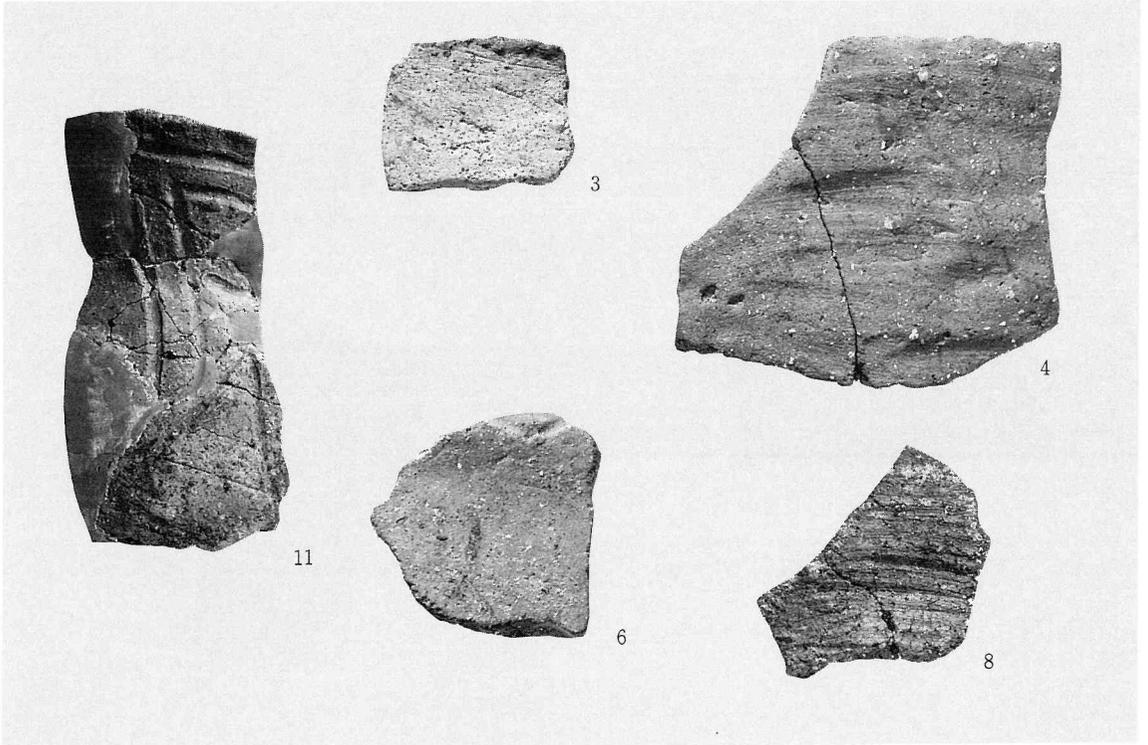
(阿部 芳郎)

卷末写真図版

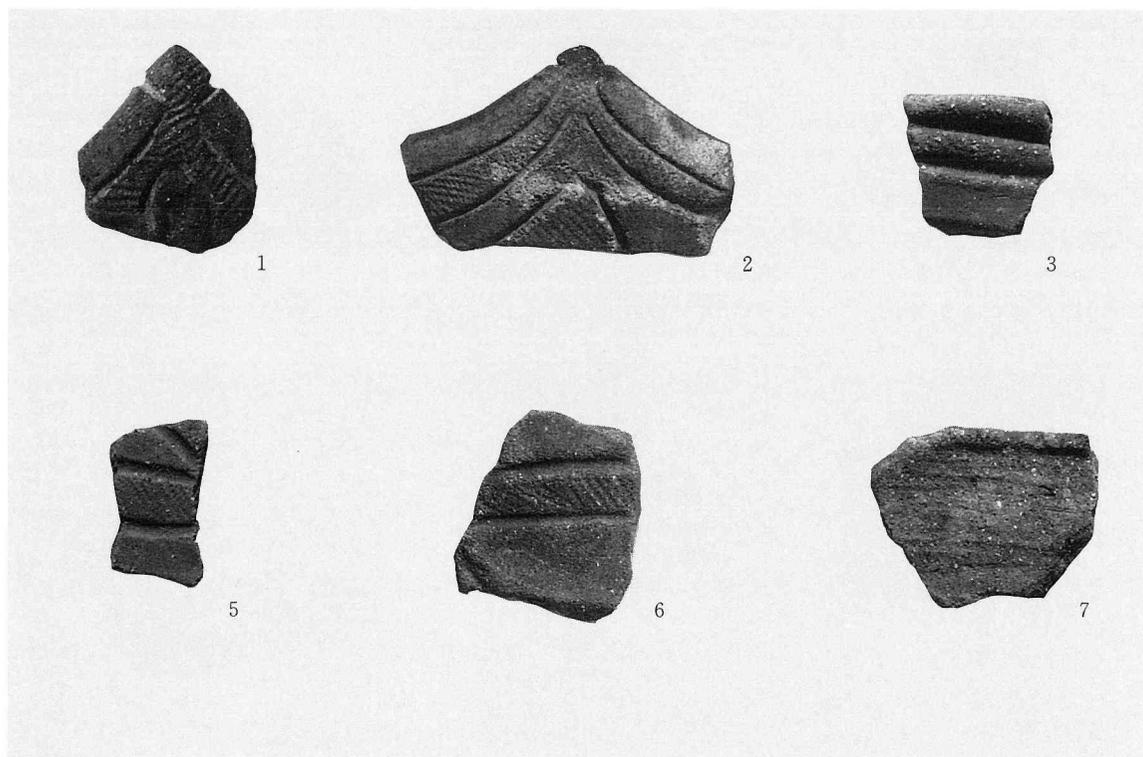
29層出土土器	図版一-1
33 a 層出土土器	図版一-2
25 a 層、貯蔵穴出土土器	図版二～九
27 b 層出土土器	図版十～二一
後期第IV群深鉢の内文集成	図版二二～二三
後期第IV群文様表出技法	図版二四
後期第IV群の成形・調整痕	図版二五
貯蔵穴出土石器	図版二六-1
25 a 層出土石器	図版二六-2～図版二七
23層下面出土石器	図版二七-2
27 b 層出土石器	図版二八～図版三十
弥生前期土器	図版三一～三二



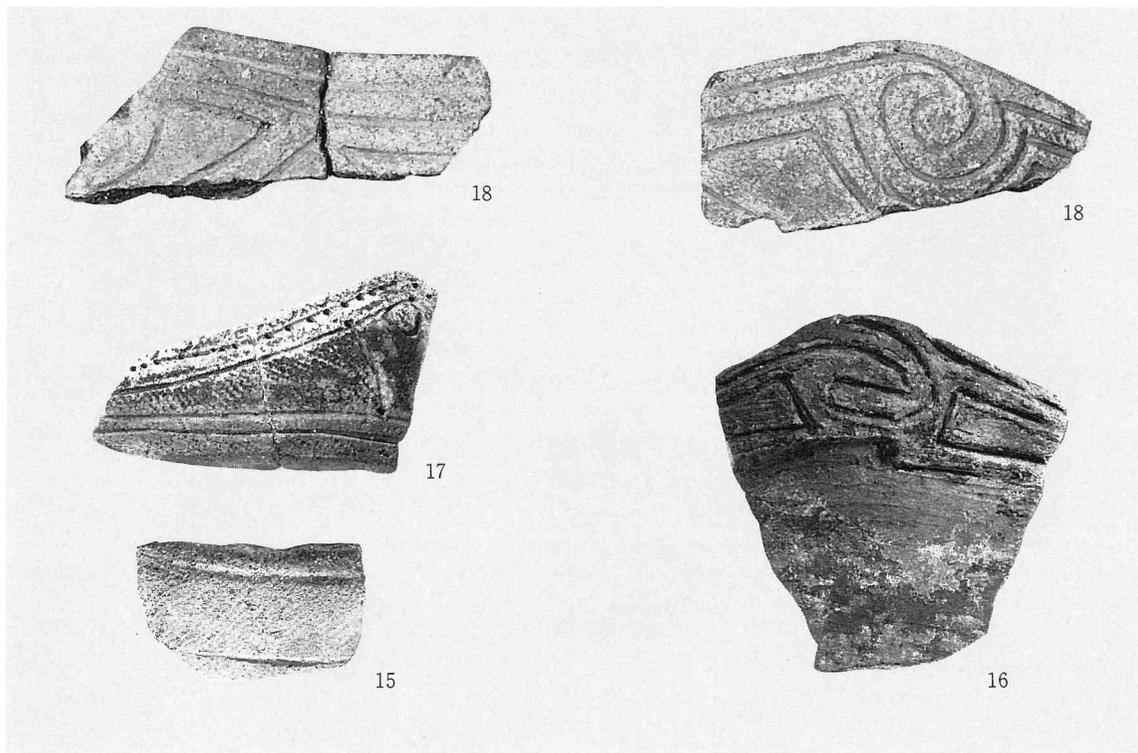
1. 29層出土土器，後期第I，II，III群（縮尺1/2）



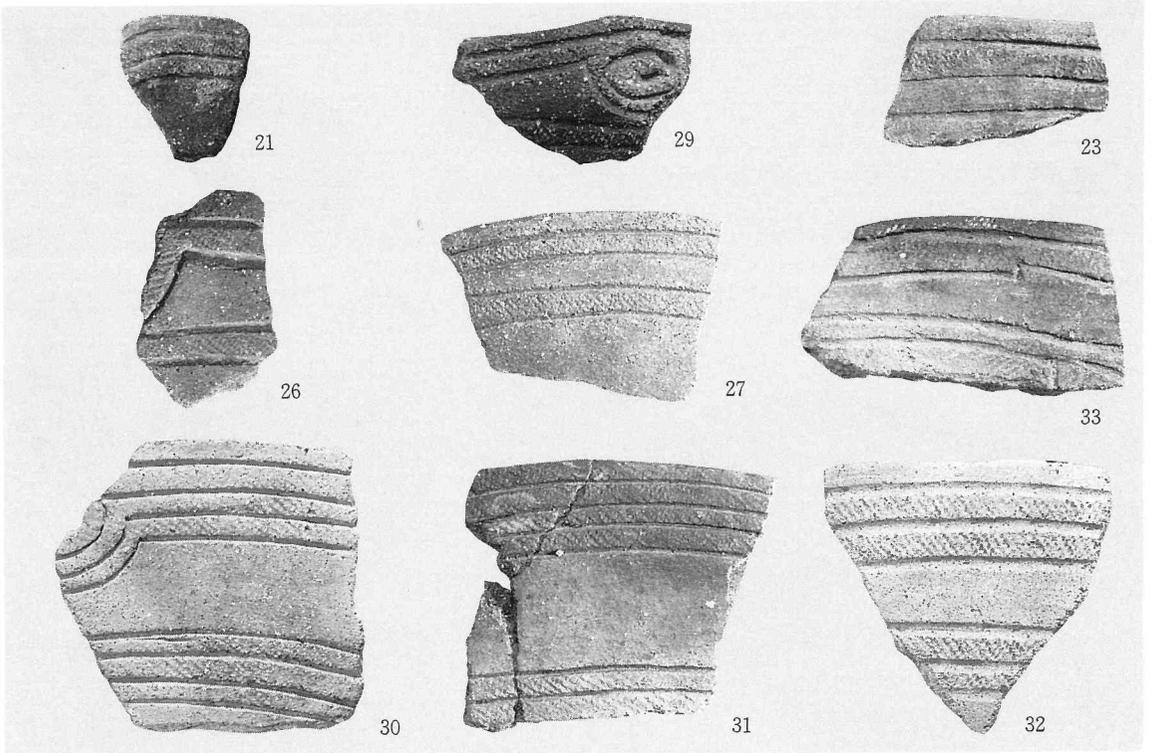
2. 33a層出土土器，後期第I，II群（縮尺：3～8：1/2，11：1/3）



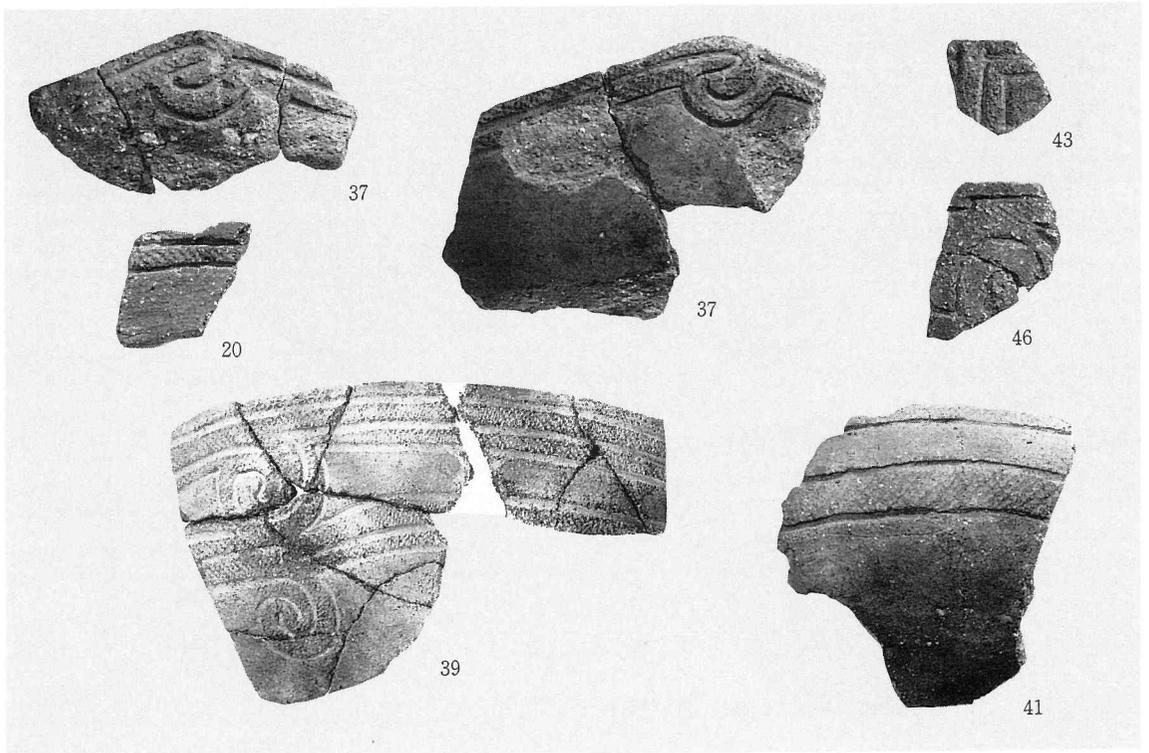
1. 25a層出土土器，後期第Ⅲ群（縮尺1/2）



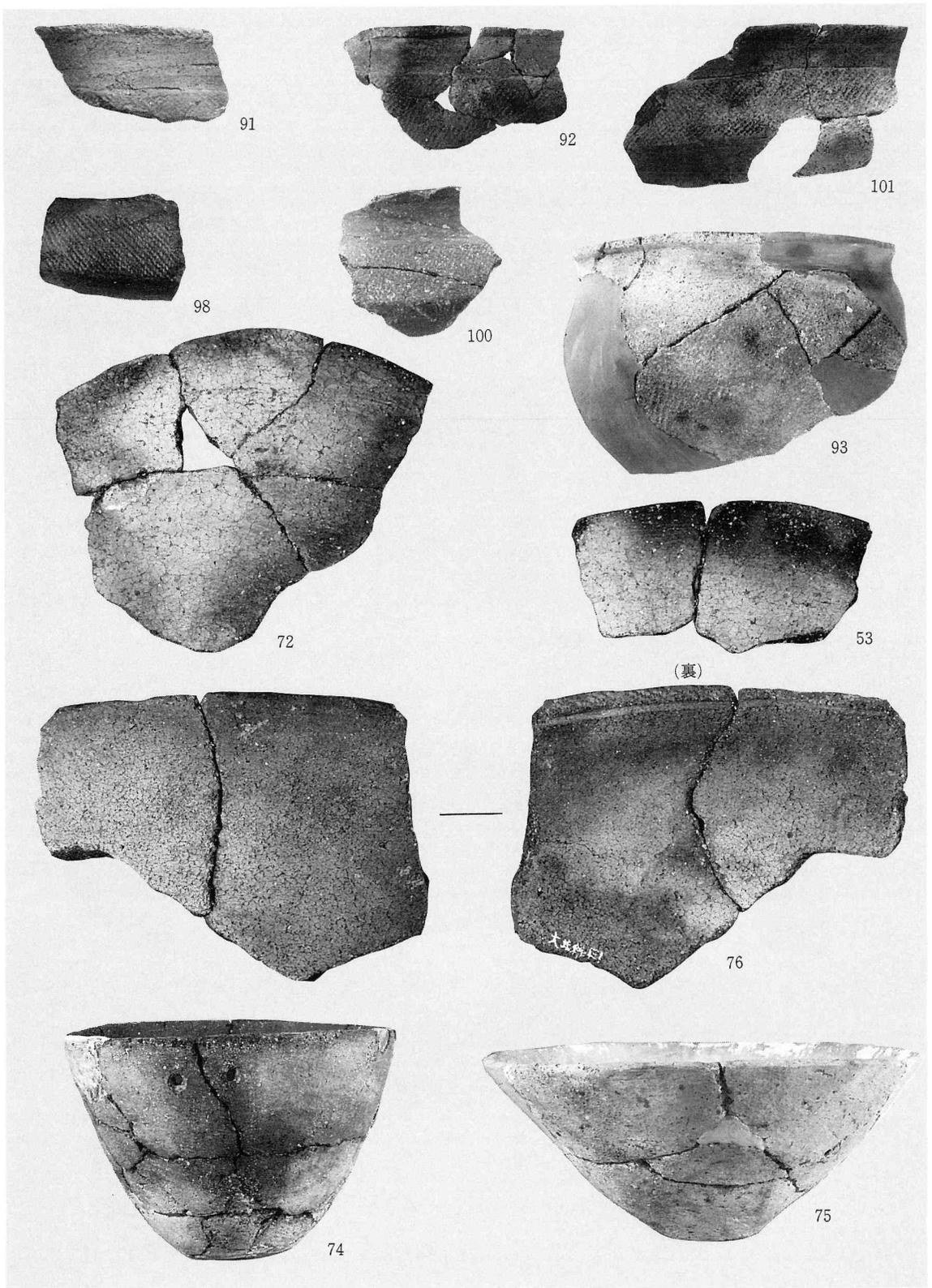
2. 25a層出土土器，後期第Ⅳ群 深鉢A類（縮尺1/2）



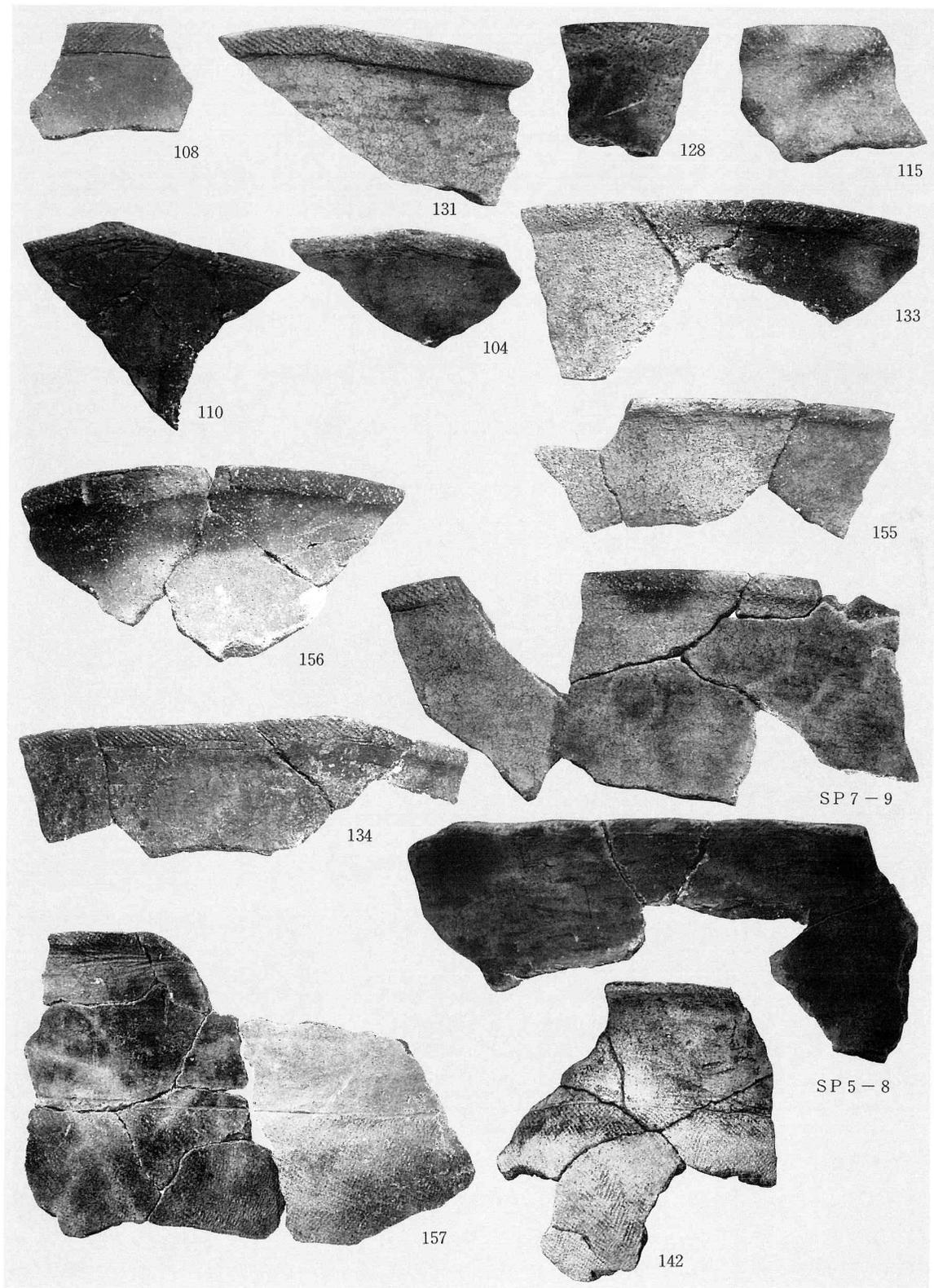
1. 25a層出土土器，後期第IV群 浅鉢A類（1）（縮尺1/2）



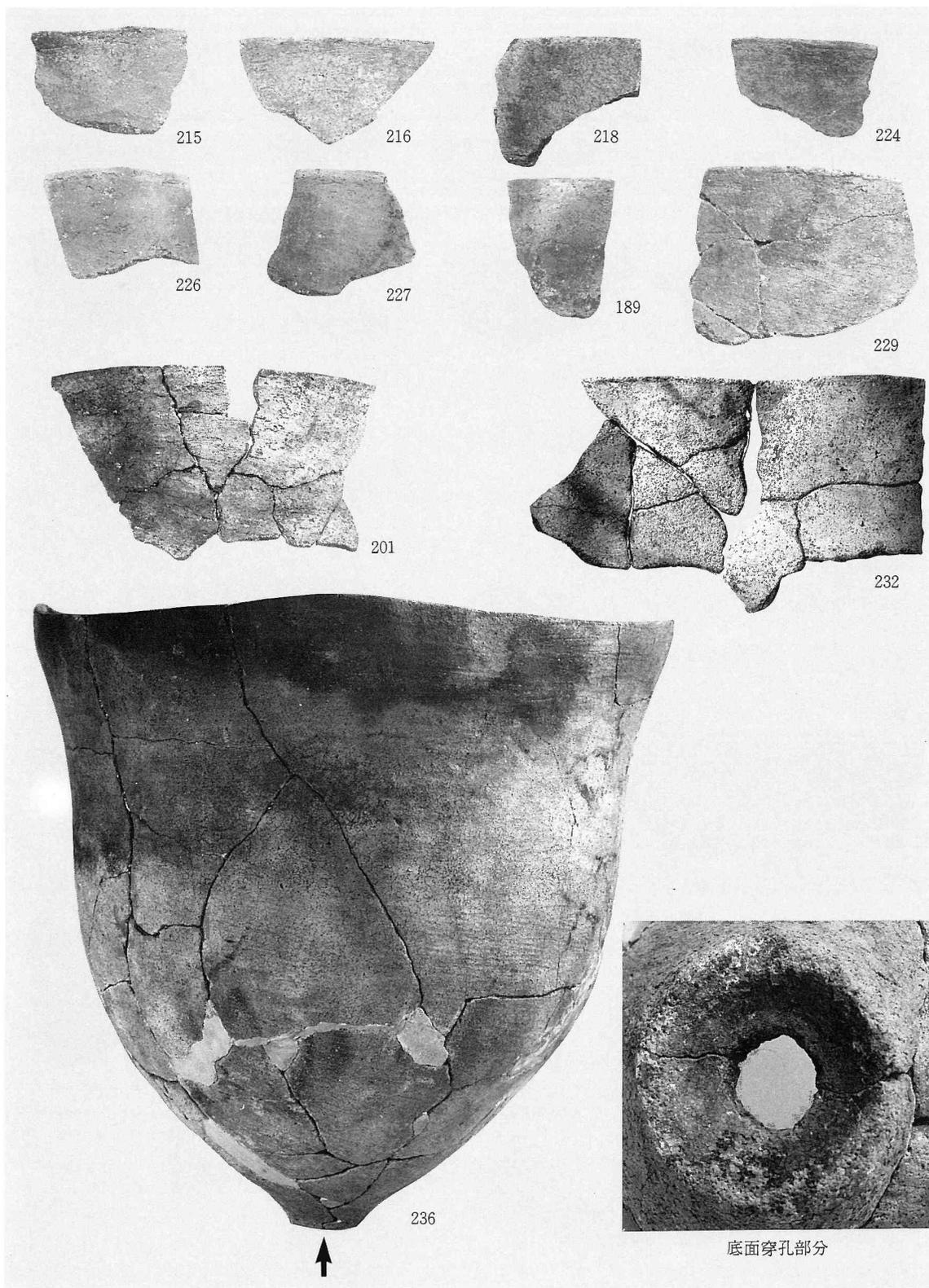
2. 25a層出土土器，後期第IV群 浅鉢A類（2）（縮尺：39のみ1/3，他は1/2）



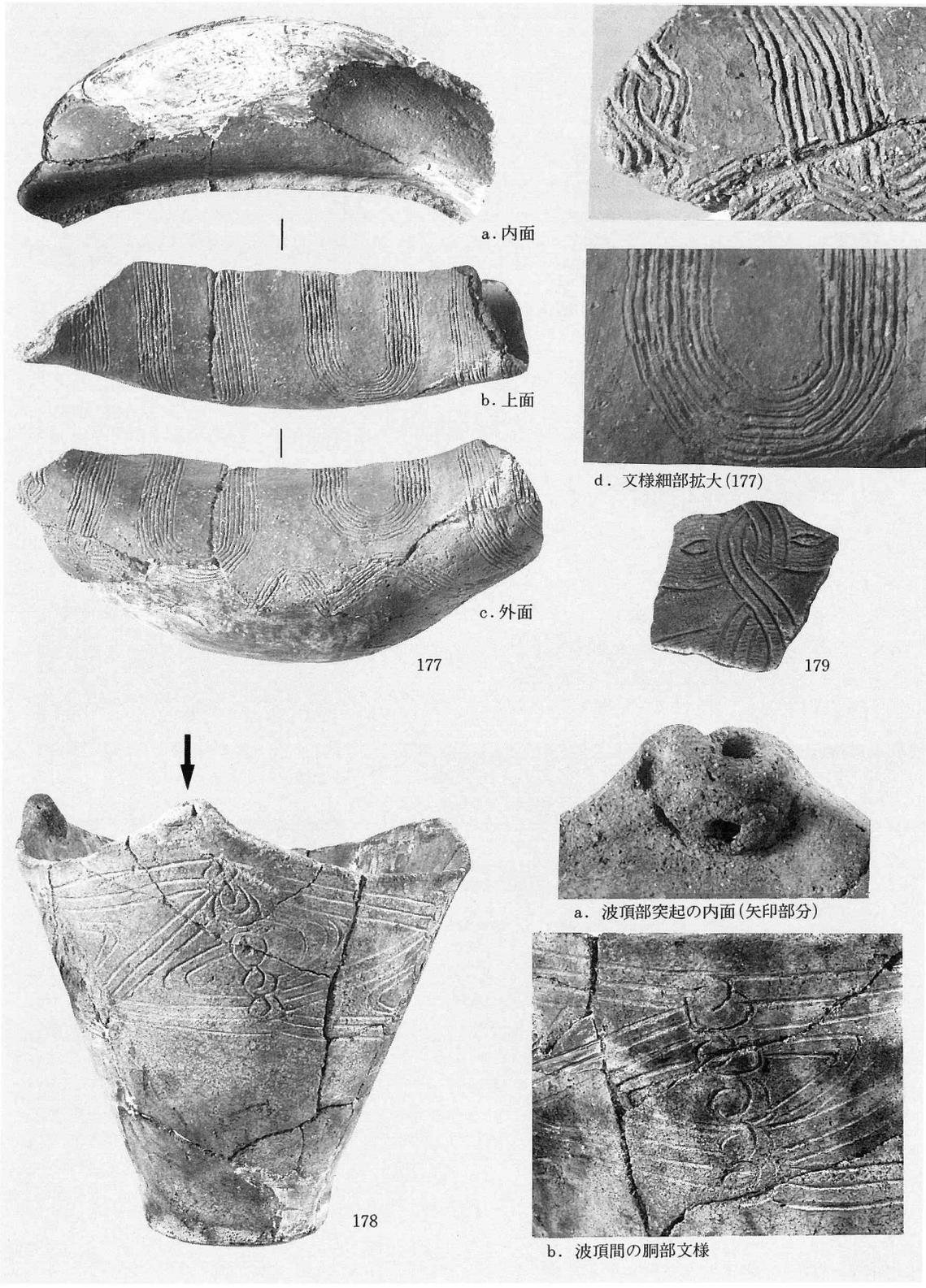
25a層出土土器，後期第Ⅳ群 鉢B類，浅鉢B類，鉢C類（縮尺：74，75：1/3，他は1/2）



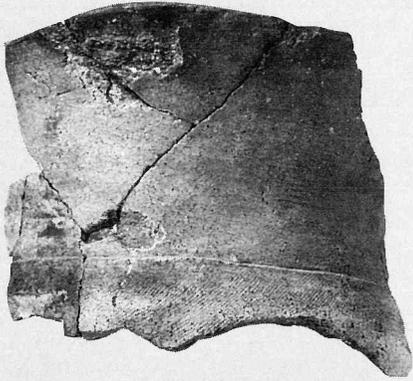
25a層および貯蔵穴出土土器，後期第IV群 深鉢B類（縮尺1/3）



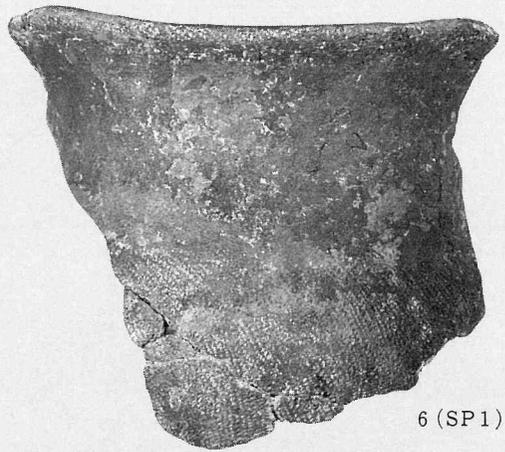
25a層出土土器，後期第IV群 深鉢C類（縮尺：215～232：1/3，236：1/4）



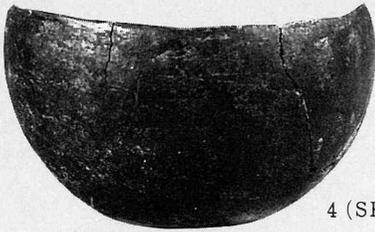
25a層出土土器，後期第Ⅳ群に伴う異系統の土器（縮尺：177，179：1/2，178：1/3）



10(SP7)



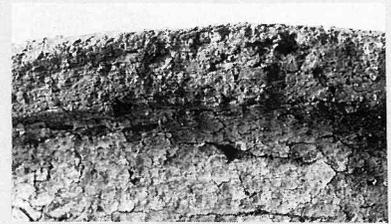
6(SP1)



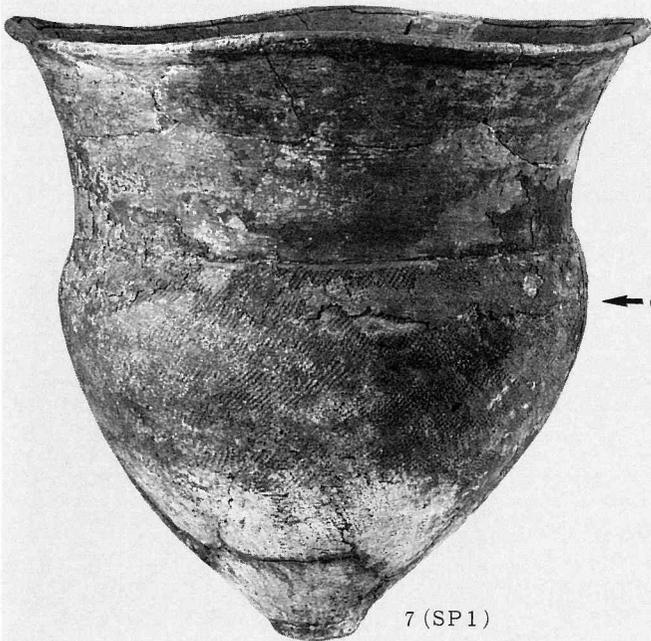
4(SP1)



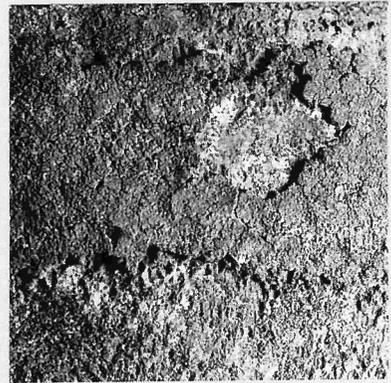
a. 口縁内文



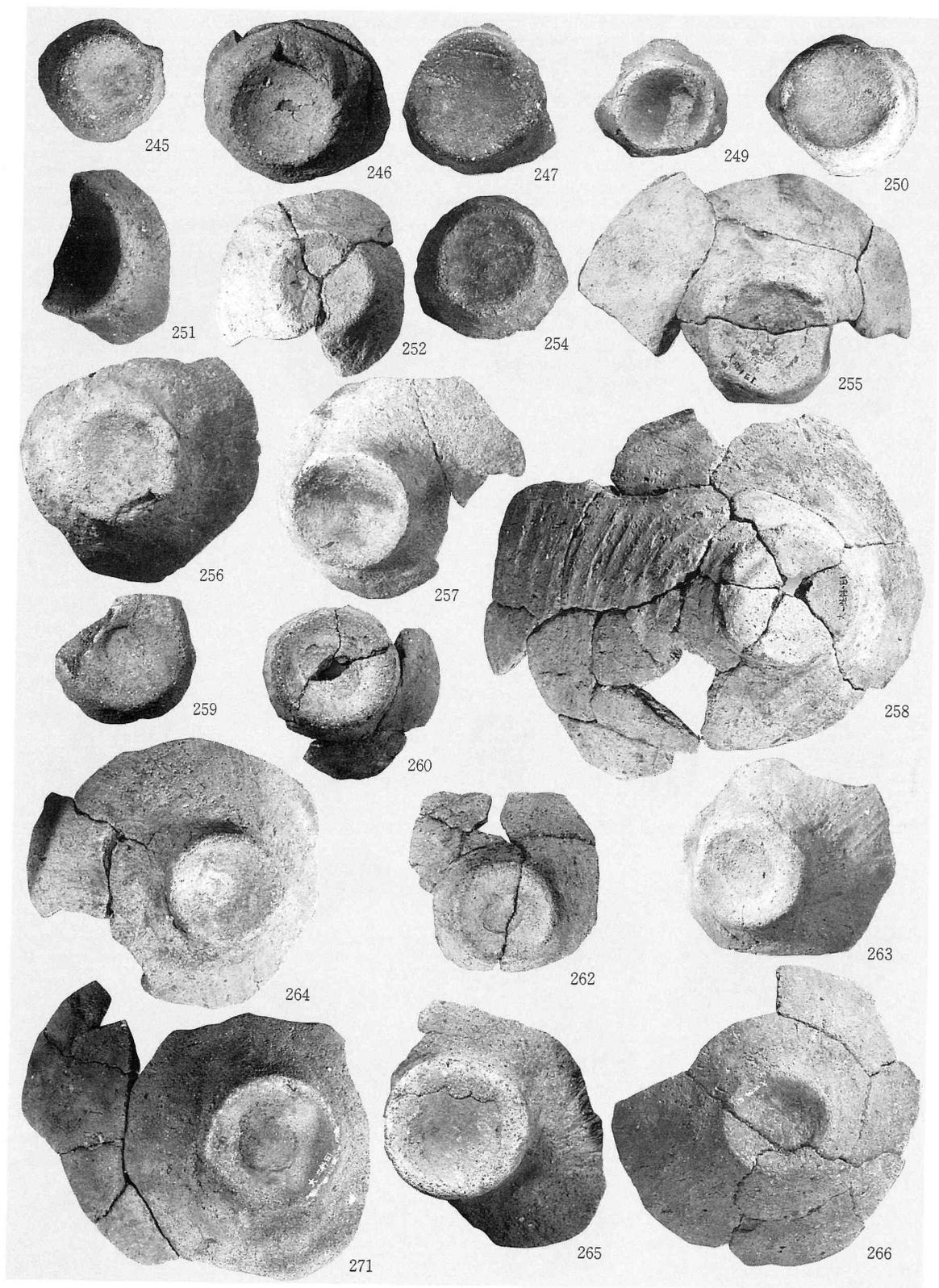
b. 口縁部の肥厚部



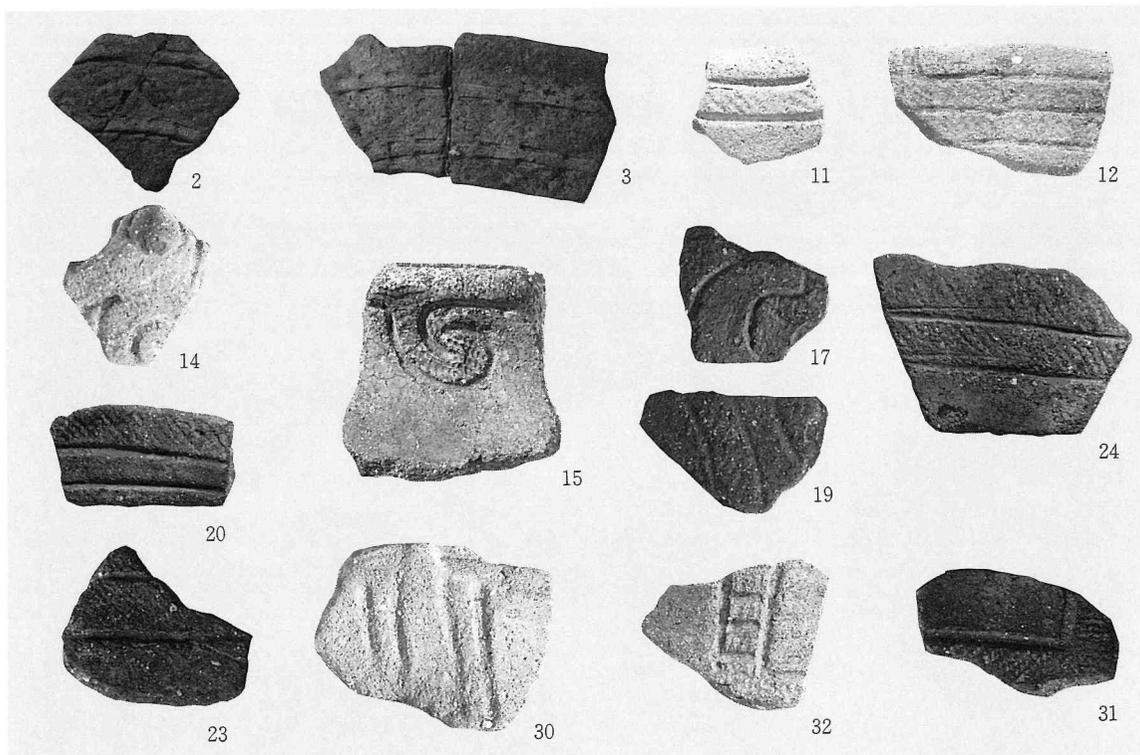
7(SP1)



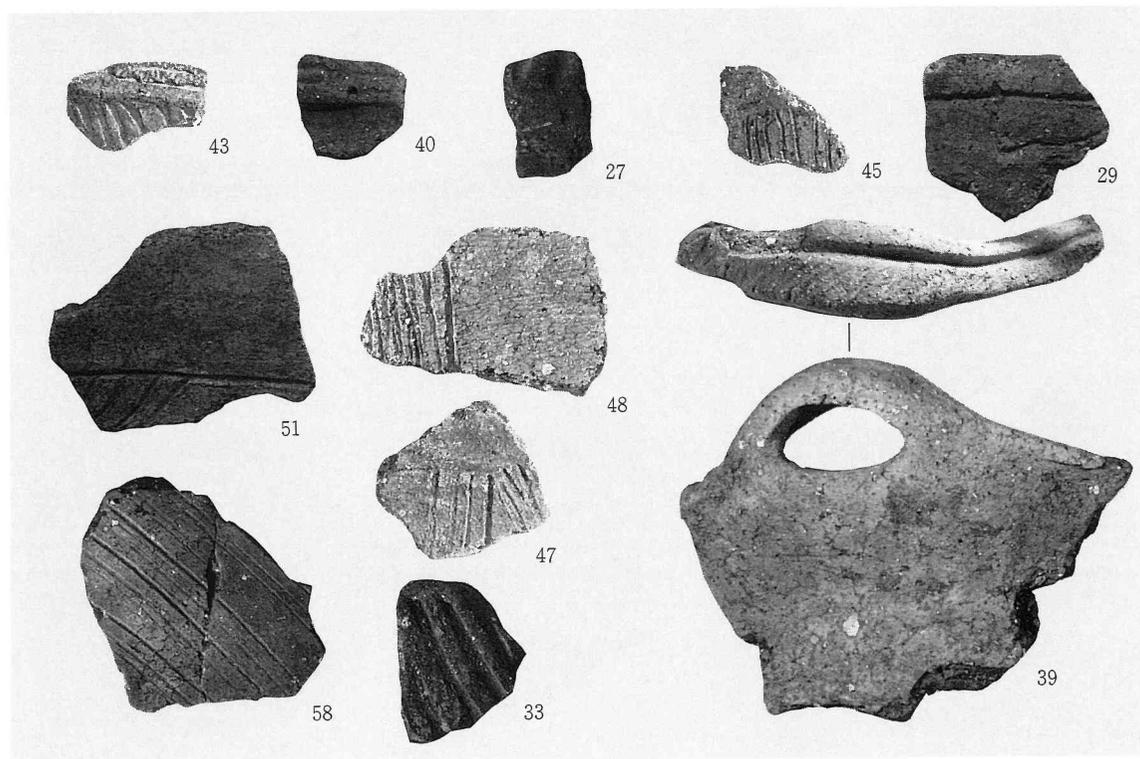
c. 厚い炭化物の付着した器表面



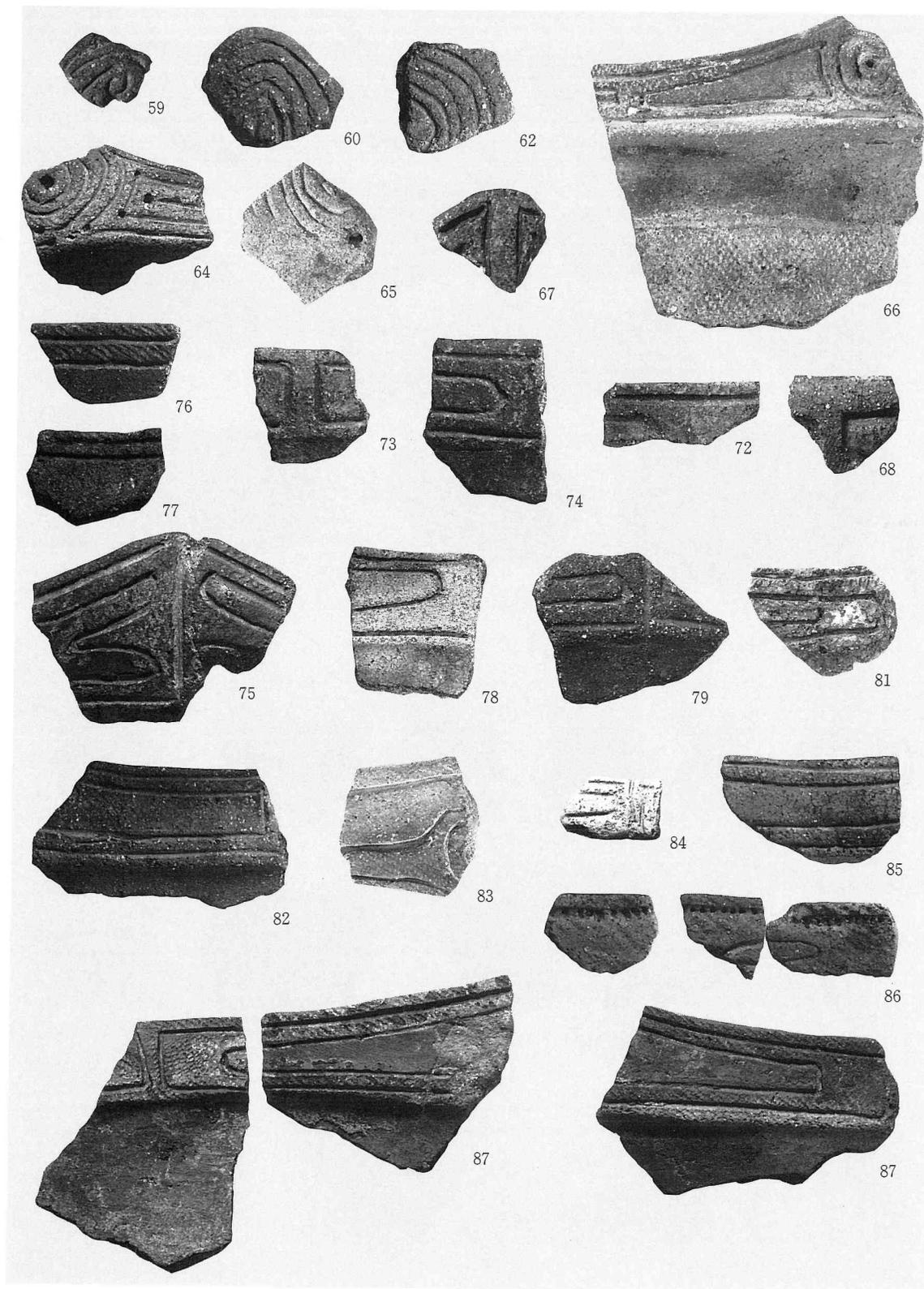
25a層出土土器，後期第IV群 底部 (縮尺1/2)



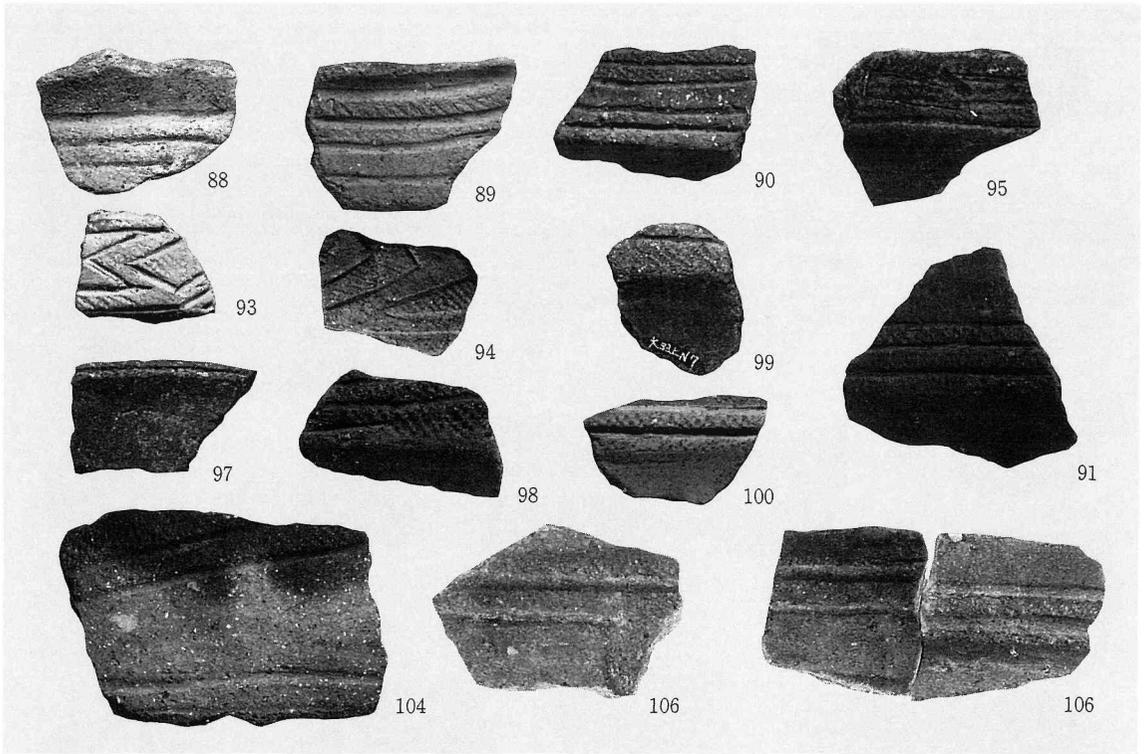
1. 27b層出土土器，後期第Ⅱ，Ⅲ群（2，3のみ前期終末）（縮尺1/2）



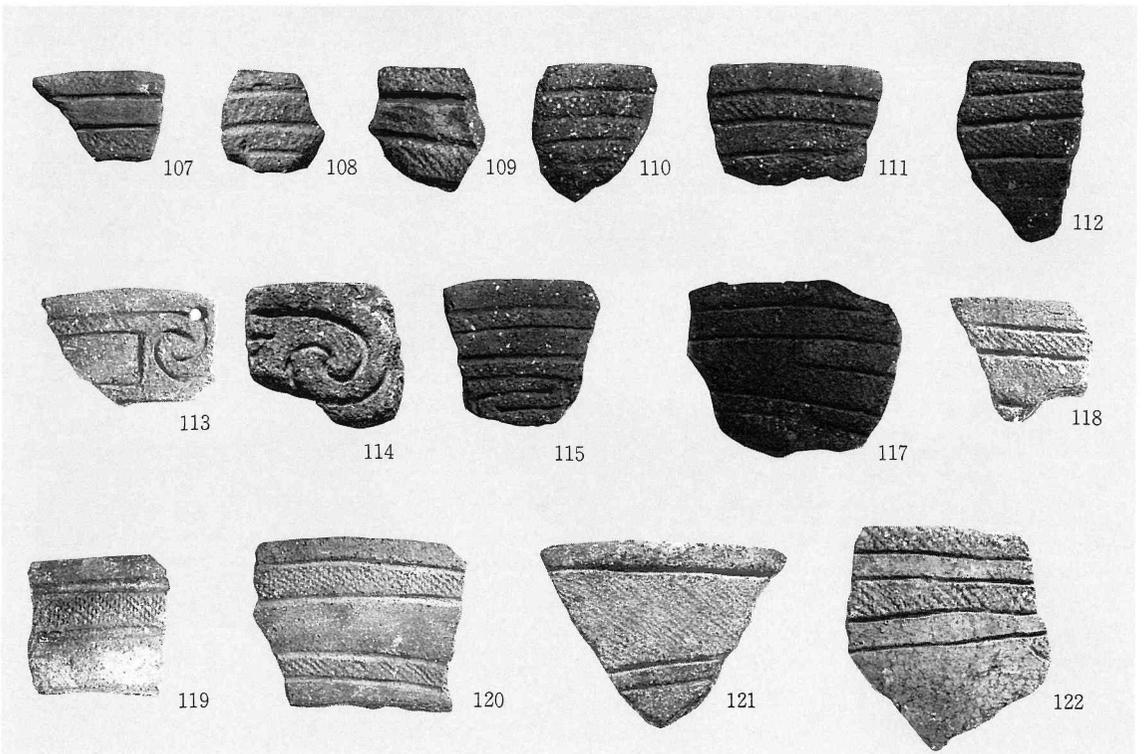
2. 27b層出土土器，後期第Ⅲ群（縮尺1/2）



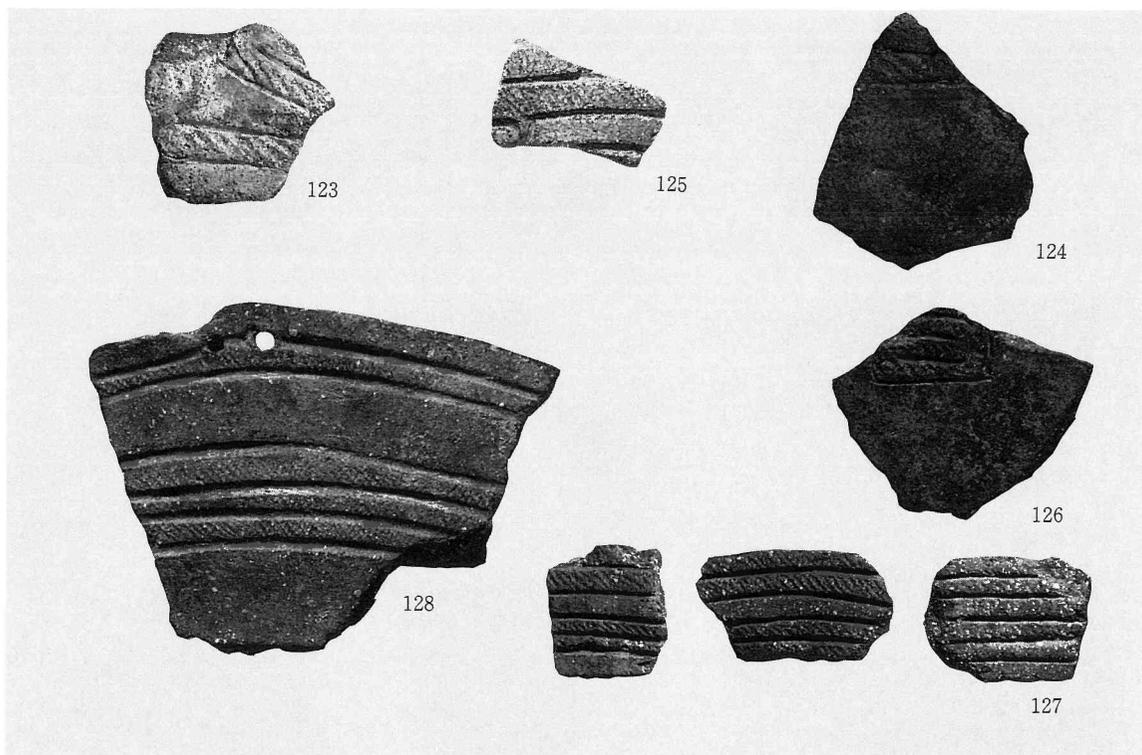
27b層出土土器，後期第Ⅳ群 深鉢A類（縮尺1/2）



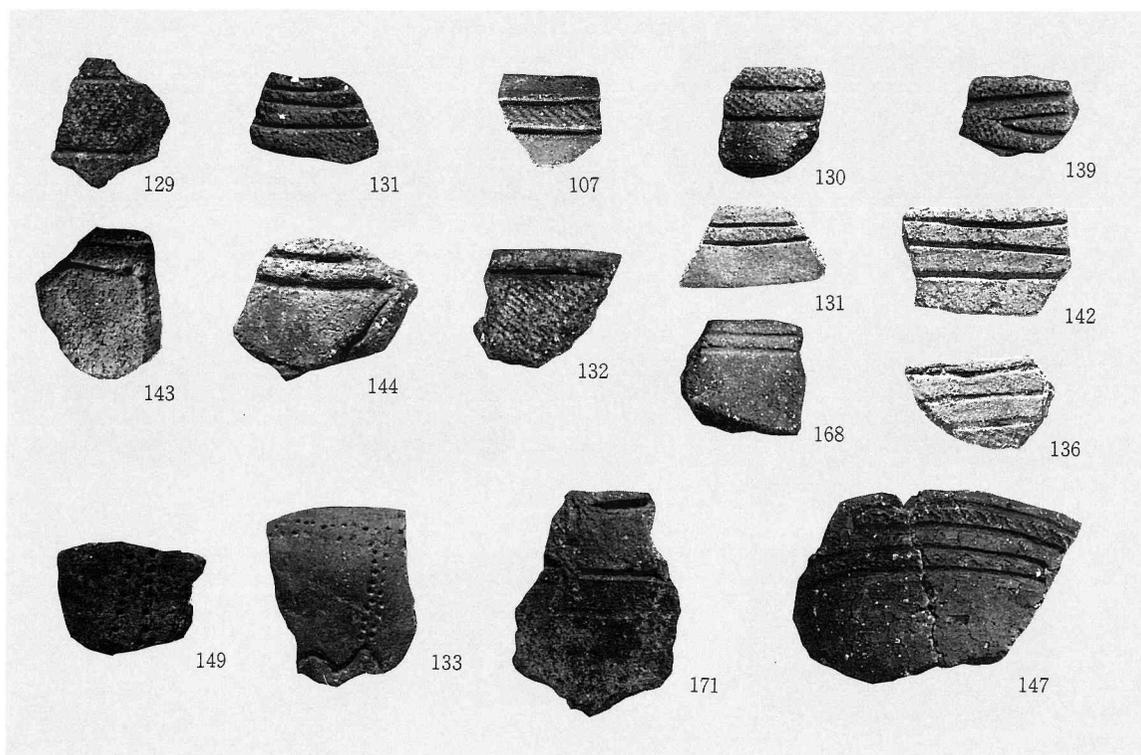
1. 27b層出土土器, 後期第IV群 深鉢A類 (縮尺1/2)



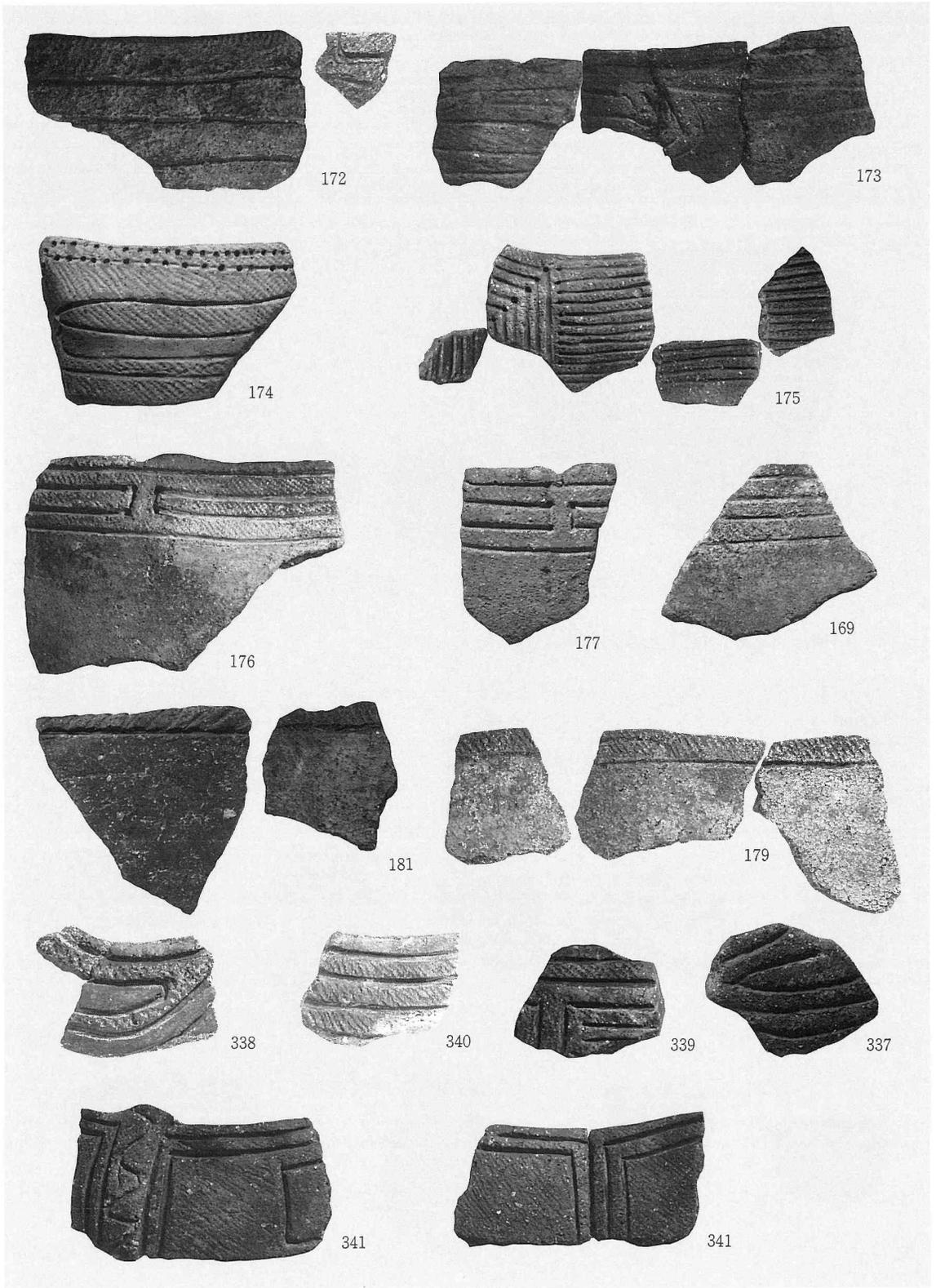
2. 27b層出土土器, 後期第IV群 浅鉢A類 (縮尺1/2)



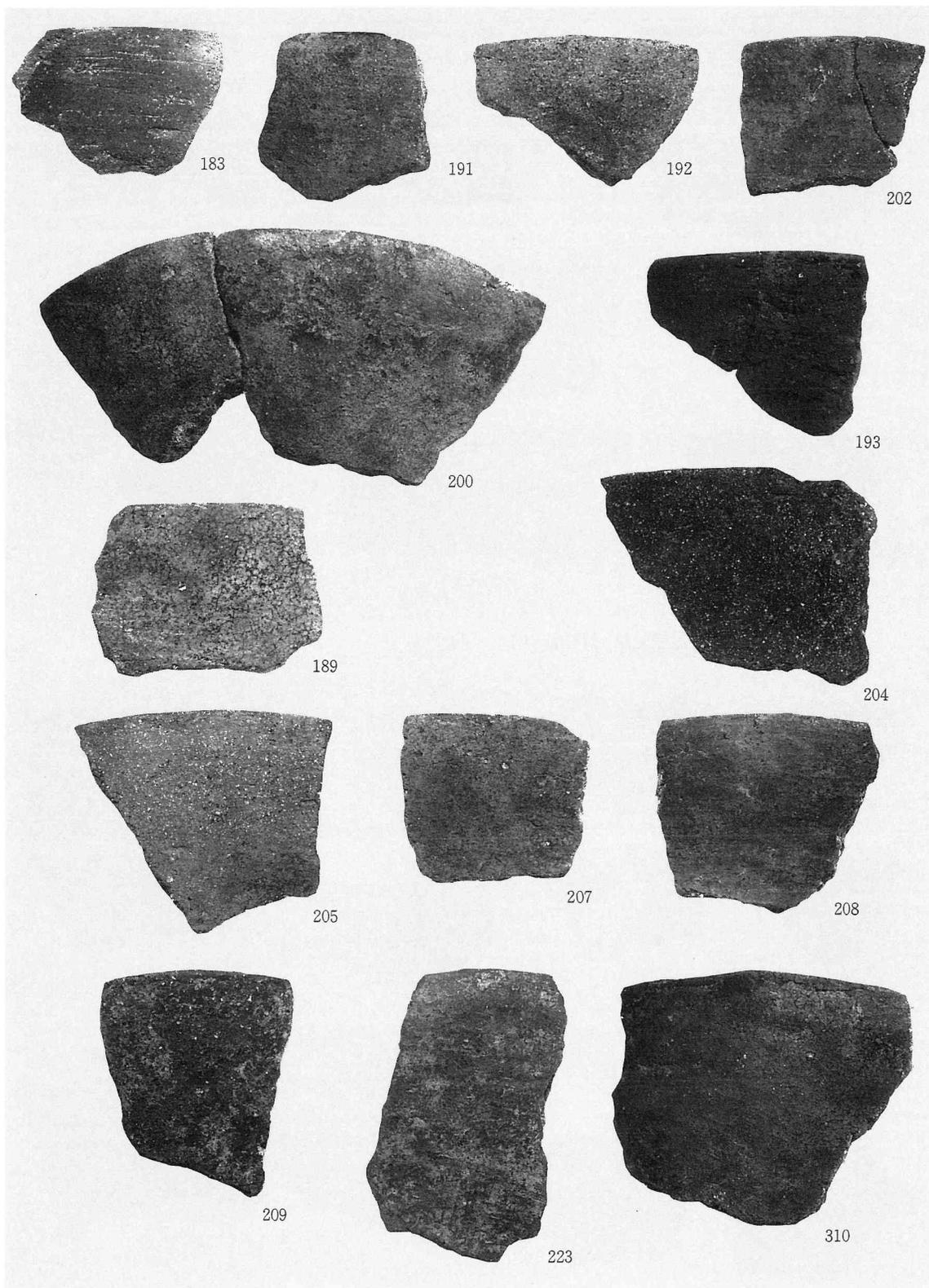
1. 27b層出土土器，後期第Ⅳ群 浅鉢A類（1）（縮尺1/2）



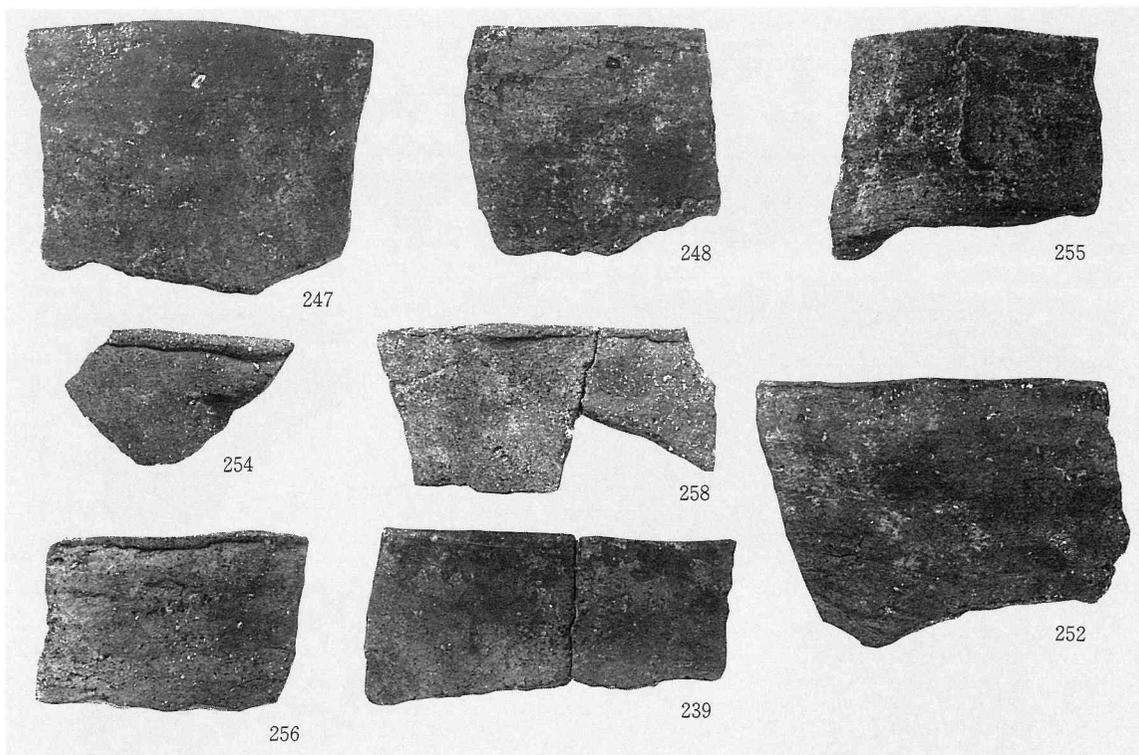
2. 27b層出土土器，後期第Ⅳ群 浅鉢A類（2）（縮尺1/2）



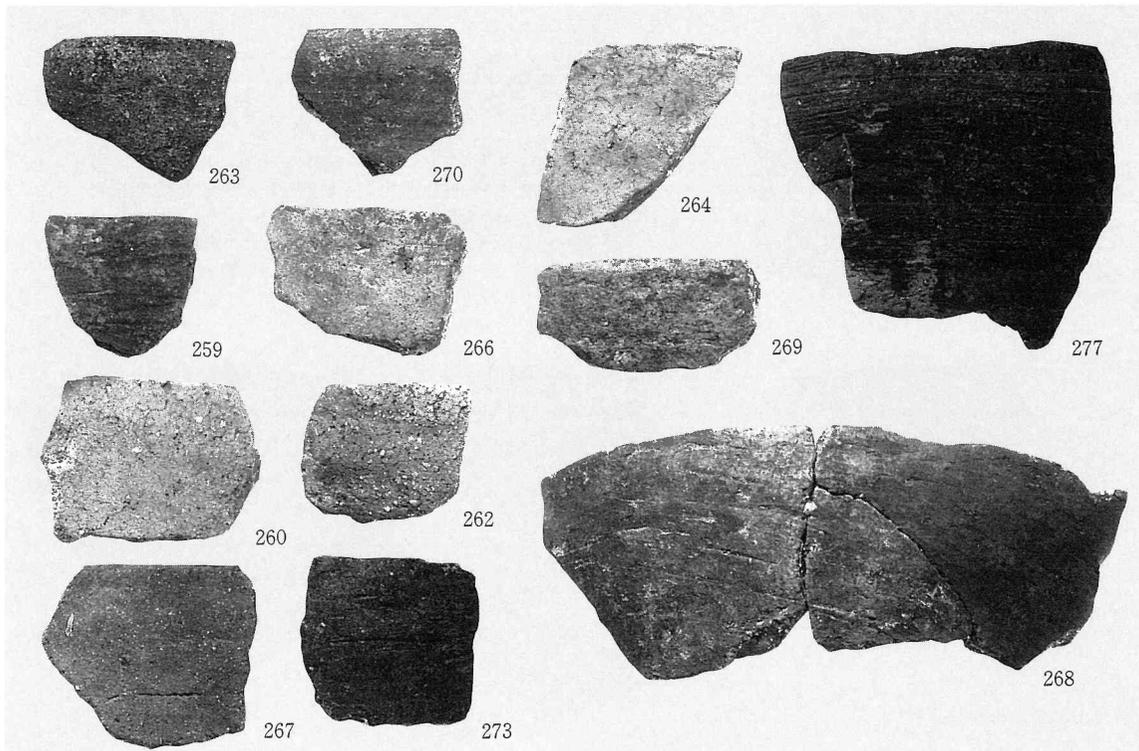
27b層出土土器，後期第Ⅳ群 鉢A類，注口土器（縮尺1/2）



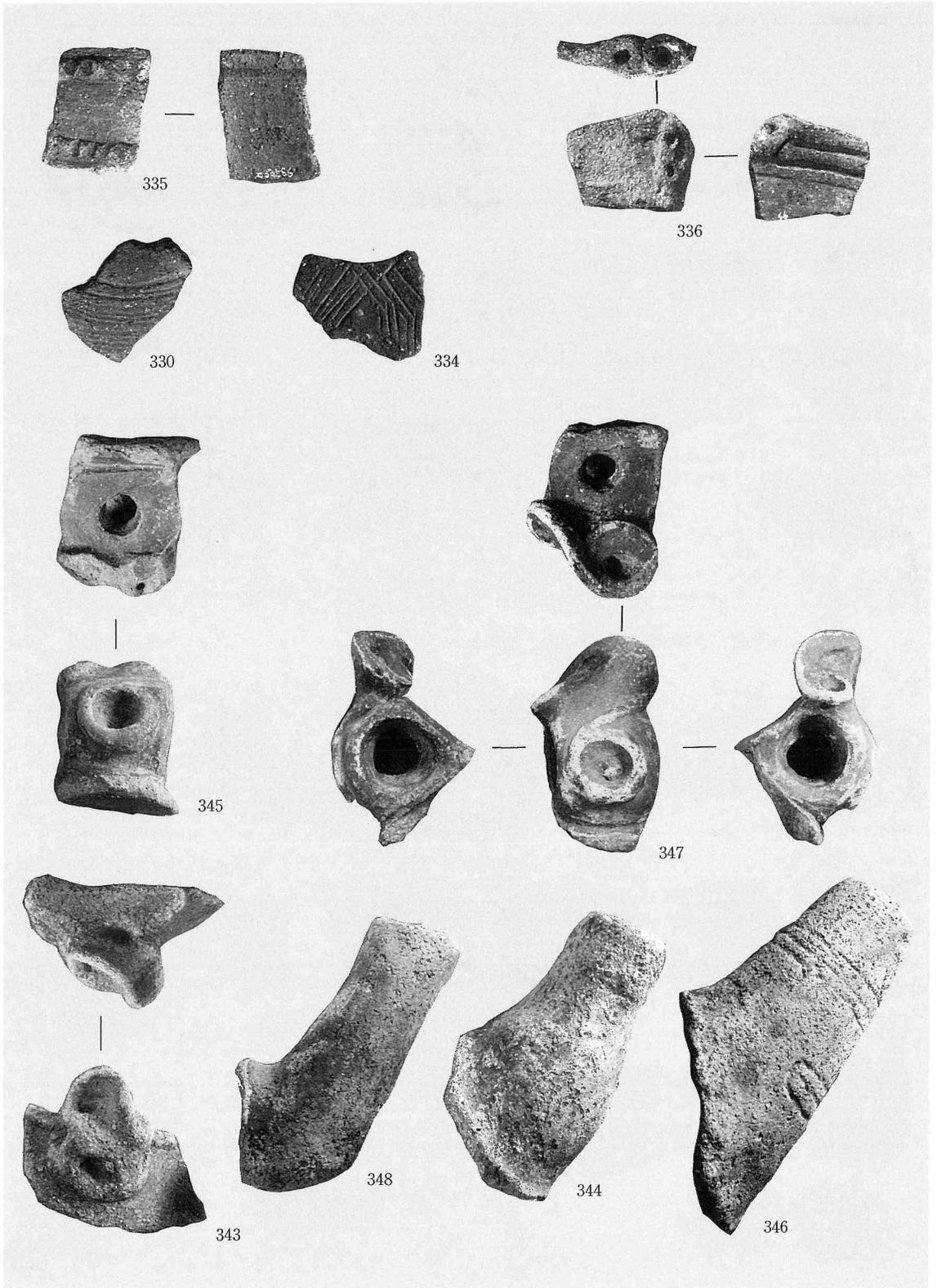
27b層出土土器，後期第Ⅳ群 浅鉢B類（1）（縮尺1/2）



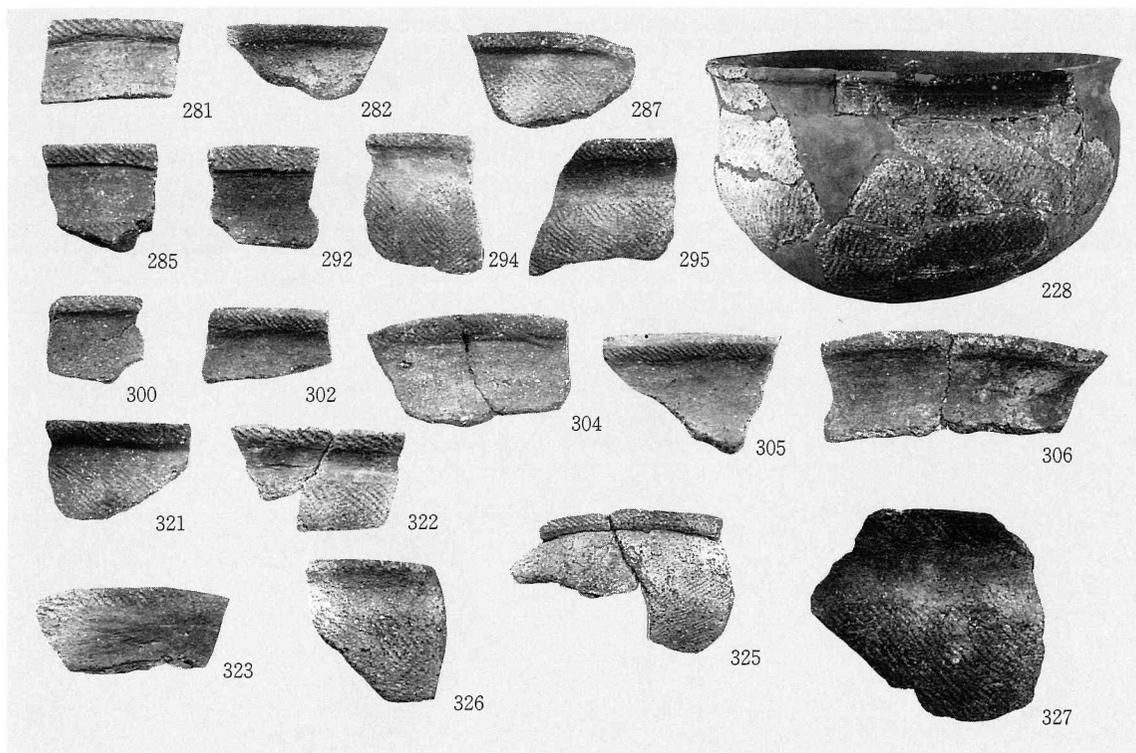
1. 27b層出土土器，後期第Ⅵ群 鉢C類（1）（縮尺1/2）



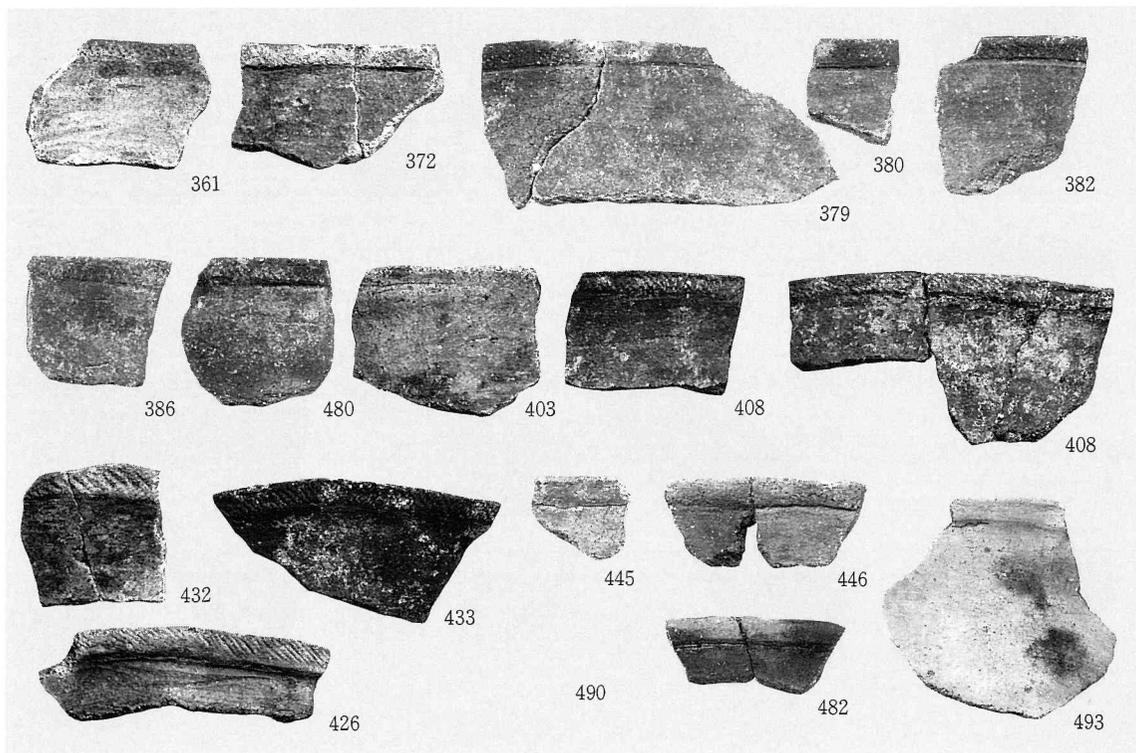
2. 27b層出土土器，後期第Ⅳ群 鉢C類（2）（縮尺1/2）



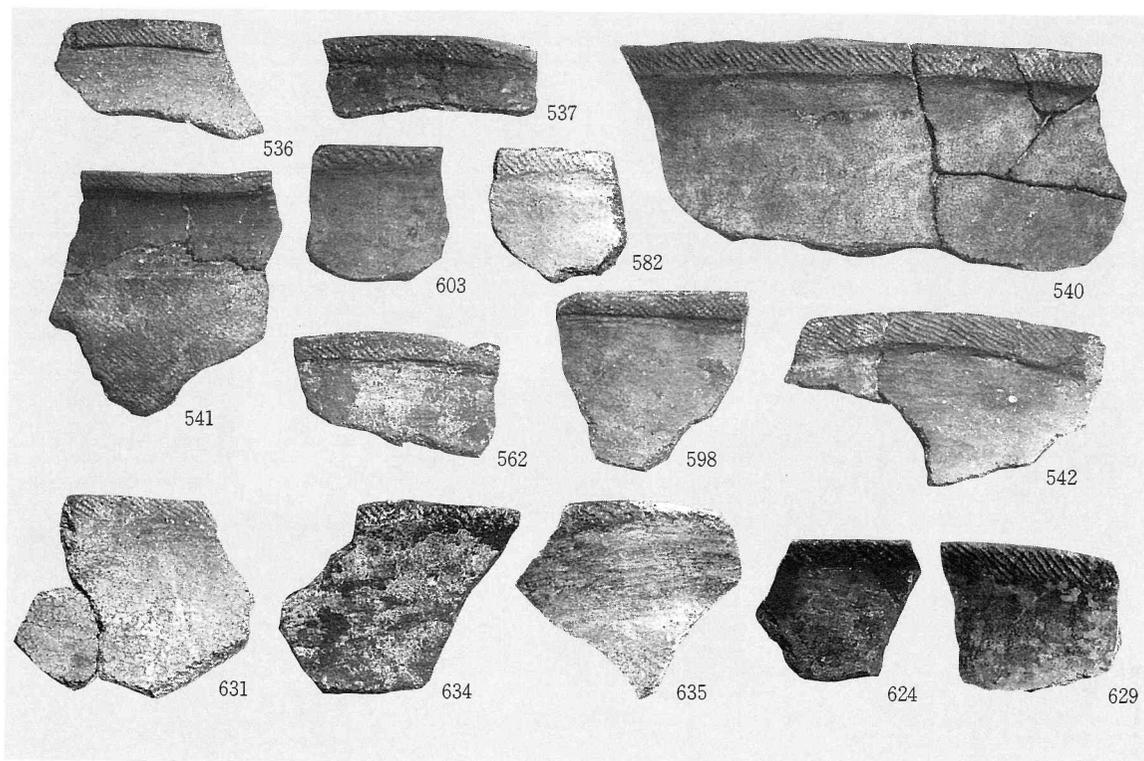
27b層出土土器，後期第Ⅳ群に伴う異系統土器，注口土器（縮尺1/2）



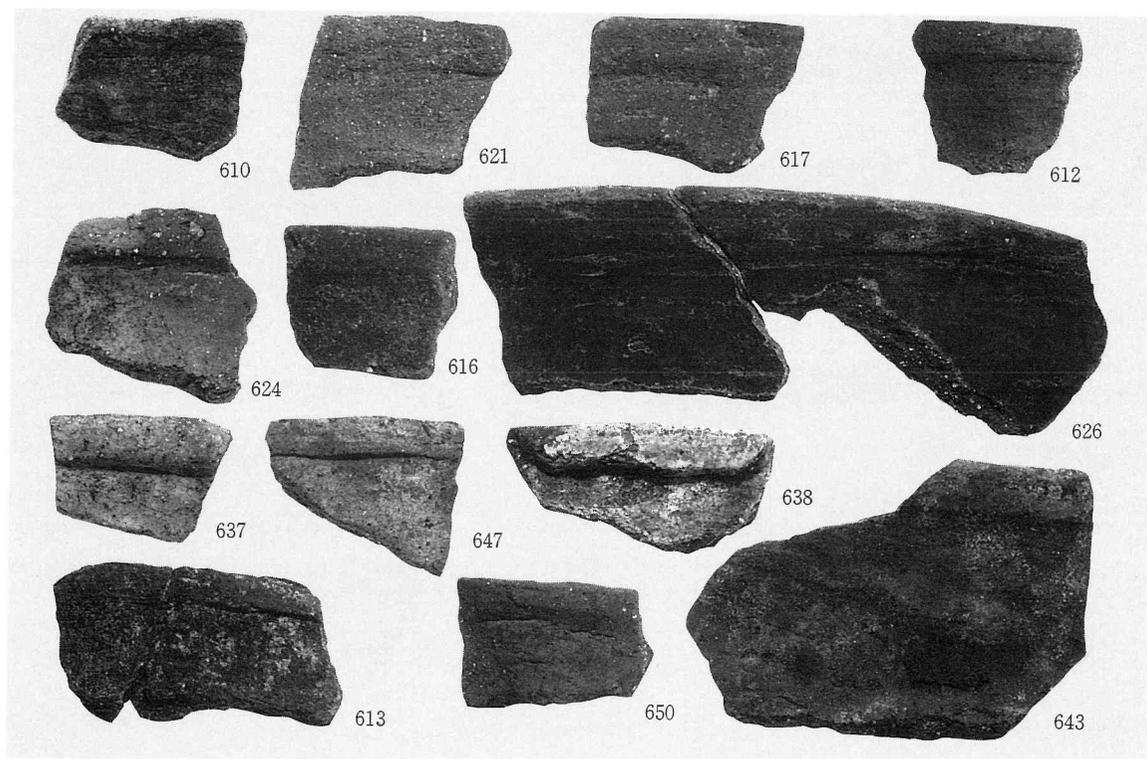
1. 27b層出土土器，後期第IV群 鉢B類 (縮尺1/3)



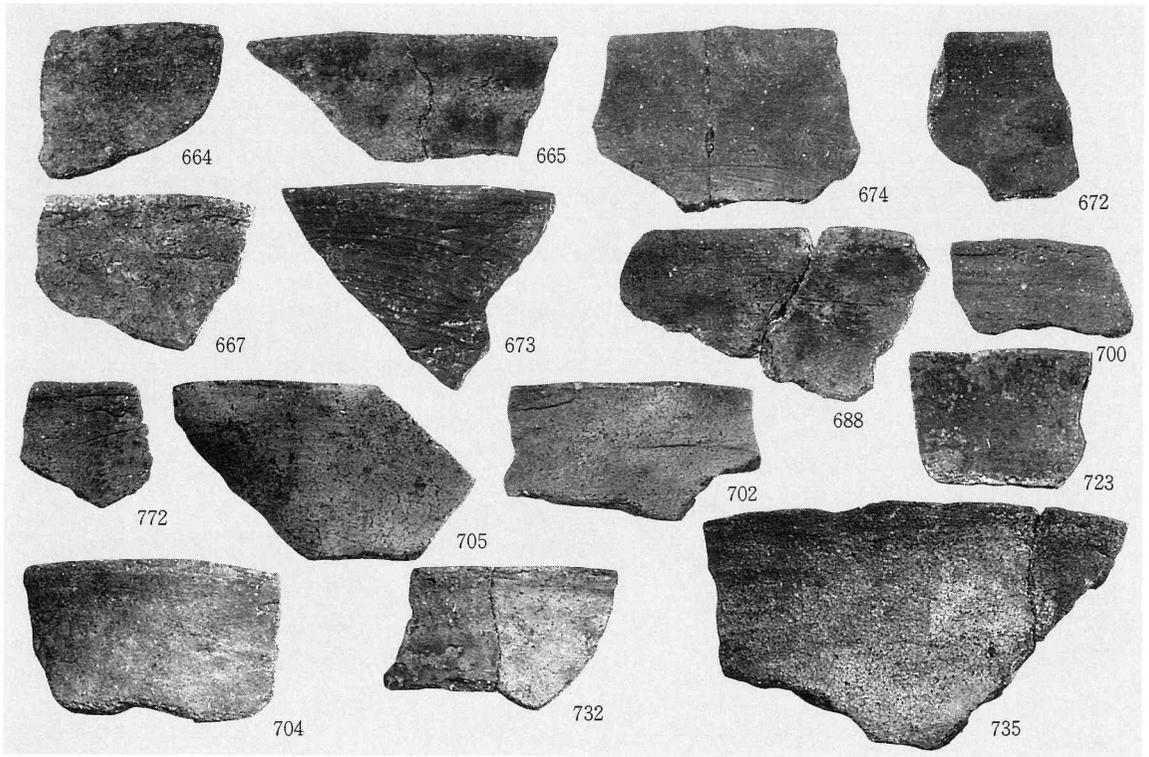
2. 27b層出土土器，後期第IV群 深鉢B類 (縮尺1/3)



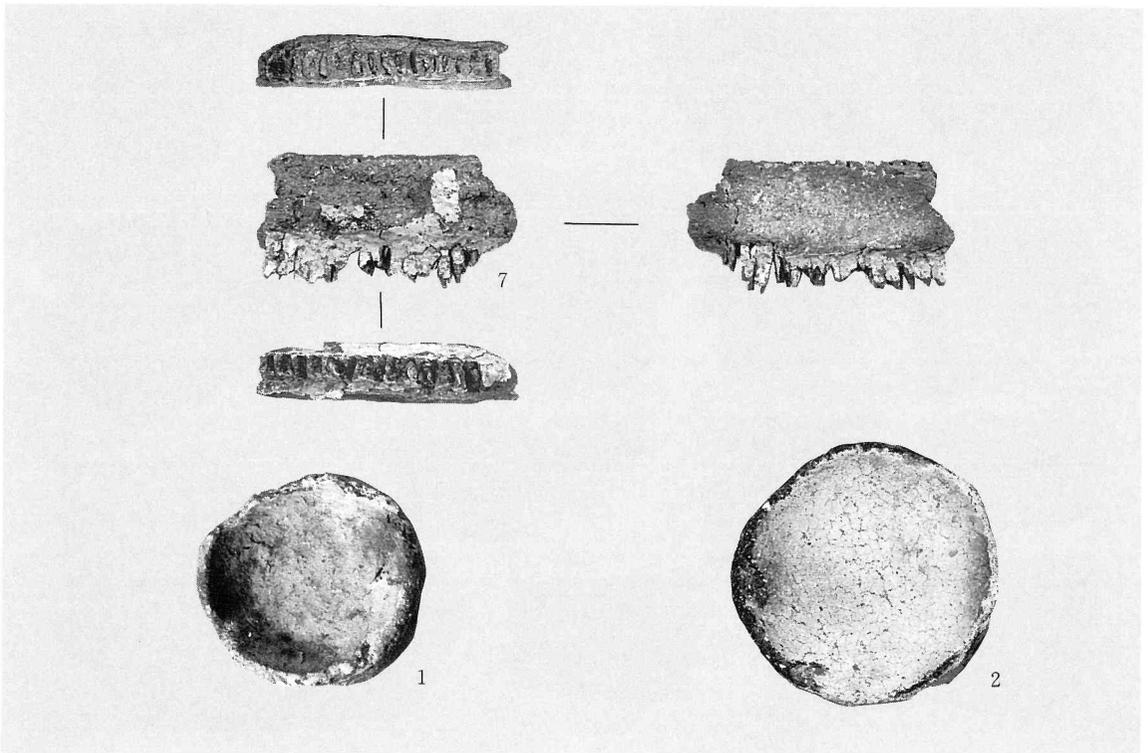
1. 27b層出土土器，後期第IV群 深鉢B類（縮尺1/3）



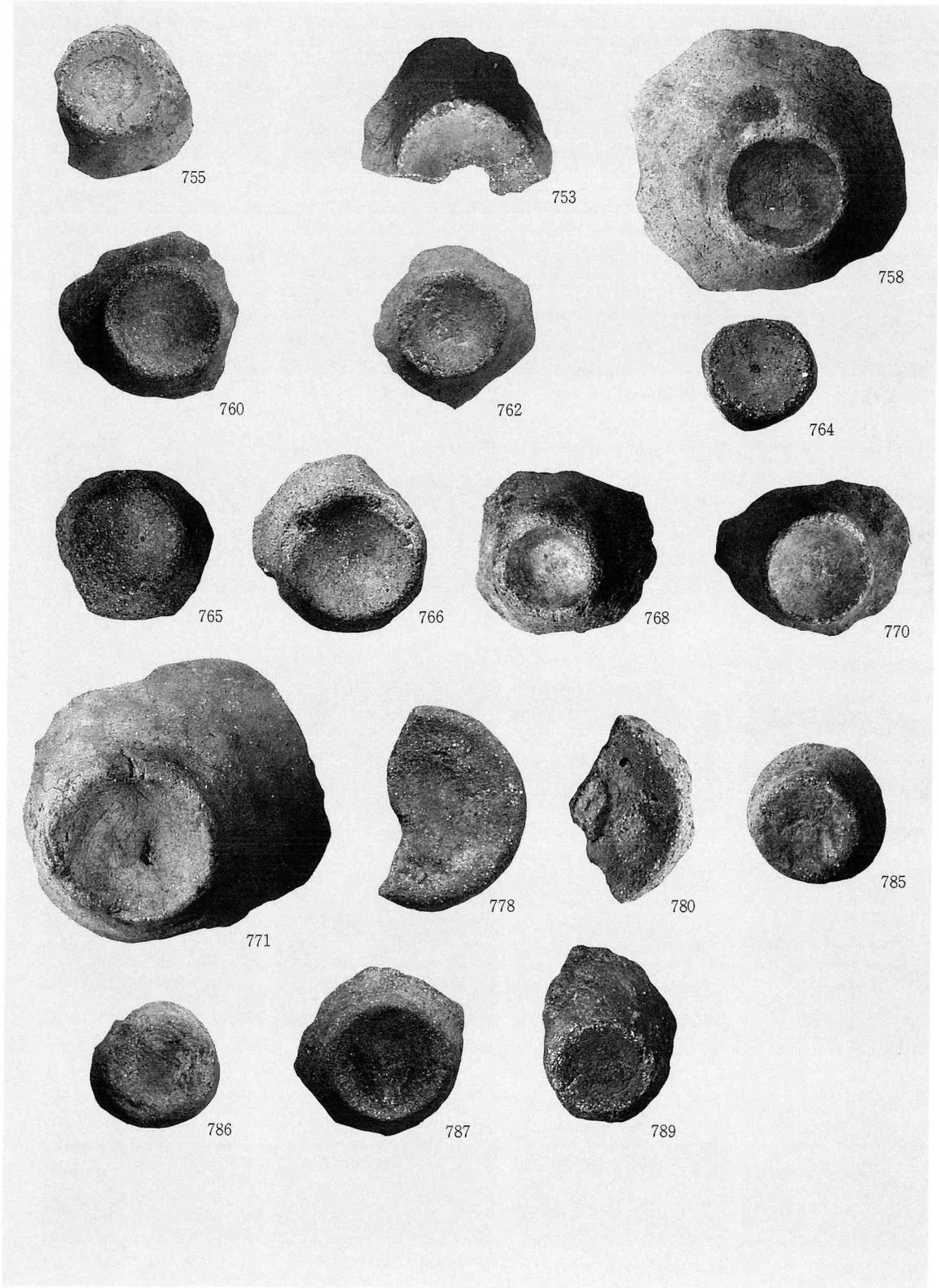
2. 27b層出土土器，後期第IV群 深鉢C類（縮尺1/3）



1. 27b層出土土器，後期第Ⅵ群 深鉢C類 (縮尺1/3)



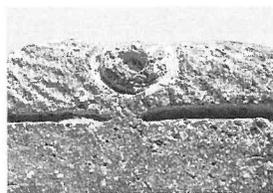
2. 27b層出土土製品 (1, 2: 土製耳飾, 7: 櫛) (縮尺1/1)



27b層出土土器，後期第Ⅳ群 底部（縮尺1/2）



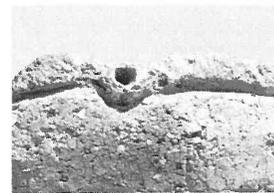
1. 27b層-355



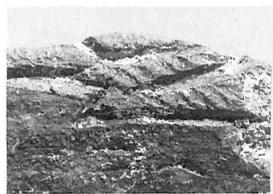
2. 27b層-428



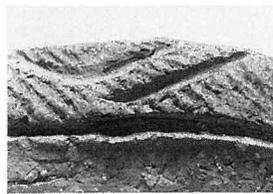
3. 27b層-392



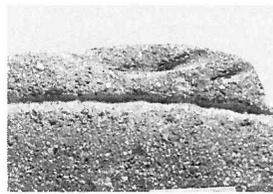
4. 27b層-430



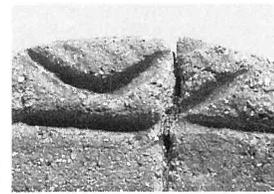
5. 27b層-480



6. 27b層-471



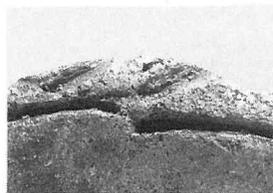
7. 27b層-476



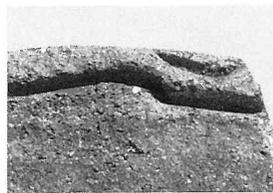
8. 27b層-407



9. 27b層-429



10. 27b層-357



11. 27b層



12. 27b層-474



13. 27b層-354



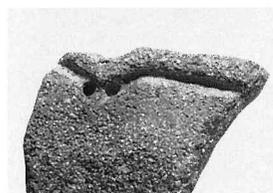
14. 27b層-353



15. 27b層-468



16. 27b層-413



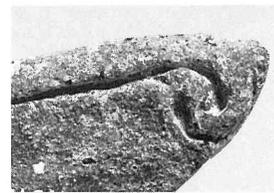
17. 27b層



18. 27b層



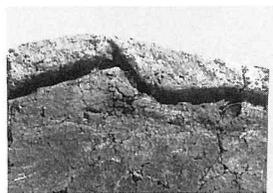
19. 27b層-478



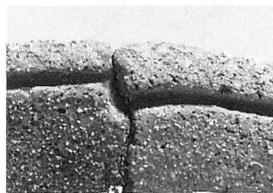
20. 27b層-472



21. 27b層-464



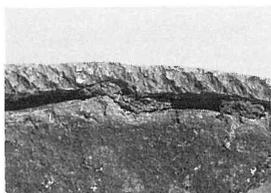
22. 27b層-432



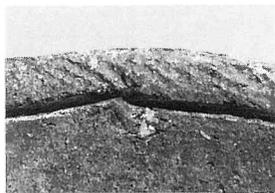
23. 27b層



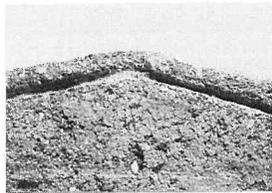
24. 27b層-431



25. 27b層-433



26. 25b層-474



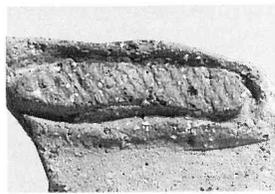
27. 27b層-477



28. 27b層-475



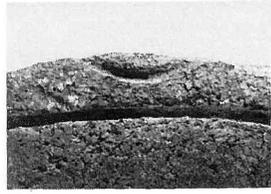
29. 27b層-367



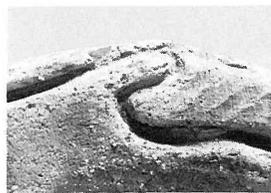
30. 27b層-138



31. 27b層-737



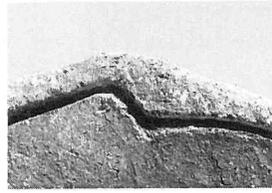
32. 25a層-134



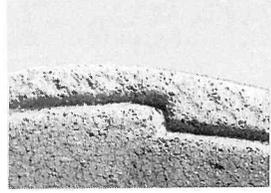
33. 25a層-134



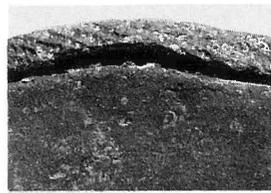
34. 25a層-105



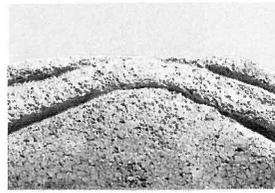
35. 25a層-110



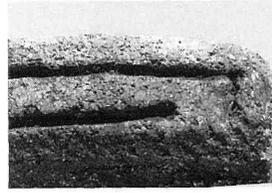
36. 25a層-136



37. 25a層-132



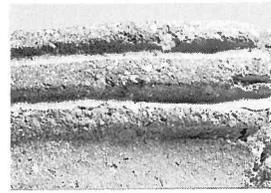
38. 25a層-104



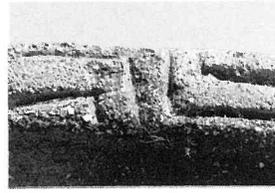
39. 27b層-535



40. 27b層-531



41. 25a層-140



42. 25a層-139



43. 25a層-142



44. 25a層-141



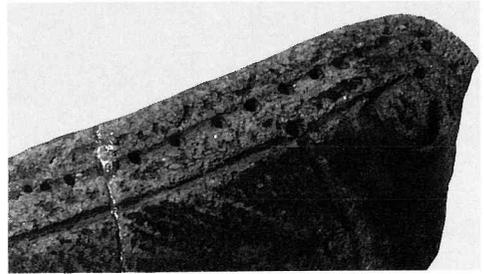
a. 27b層-66



b. 27b層-176



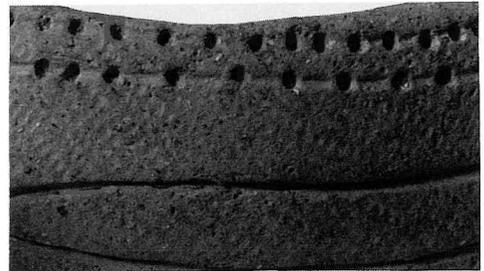
c. 27b層-64



d. 25a層-17



e. 25a層-16



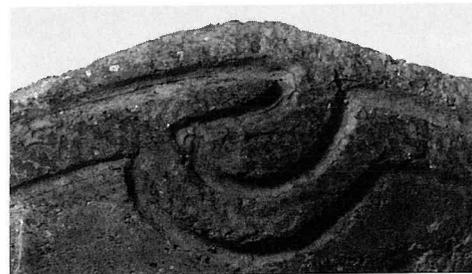
f. 27b層-174



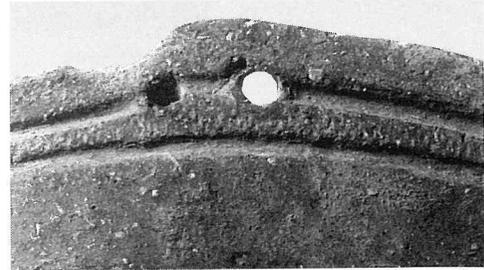
g. 25a層-33



h. 25a層-30



i. 25a層-37

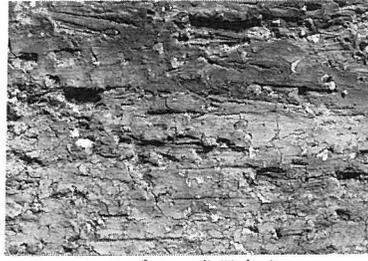


j. 27b層-128

後期第Ⅳ群土器の文様表出技法（縮尺不同）



1. ヘラ状工具によるケズリ痕



2. ヘラケズリ→巻貝条痕



3. 巻貝条痕→ヘラミガキ



4. 巻貝条痕



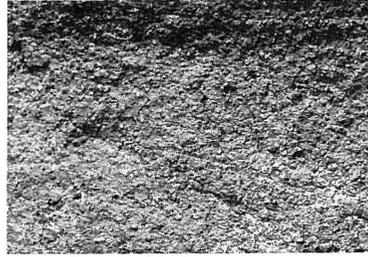
5. ナデ→巻貝条痕



6. 巻貝条痕→ナデ



7. 指頭によるナデ



8. 砂粒を覆うナデ



9. 砂粒の浮出を伴うナデ



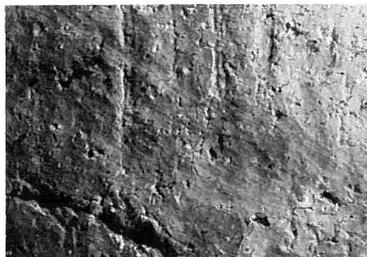
10. ヘラケズリ→ナデ



11. ヘラ状工具によるナデ



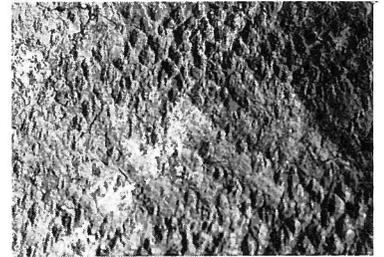
12. ヘラ状工具によるミガキ



13. 巻貝条痕→ミガキ

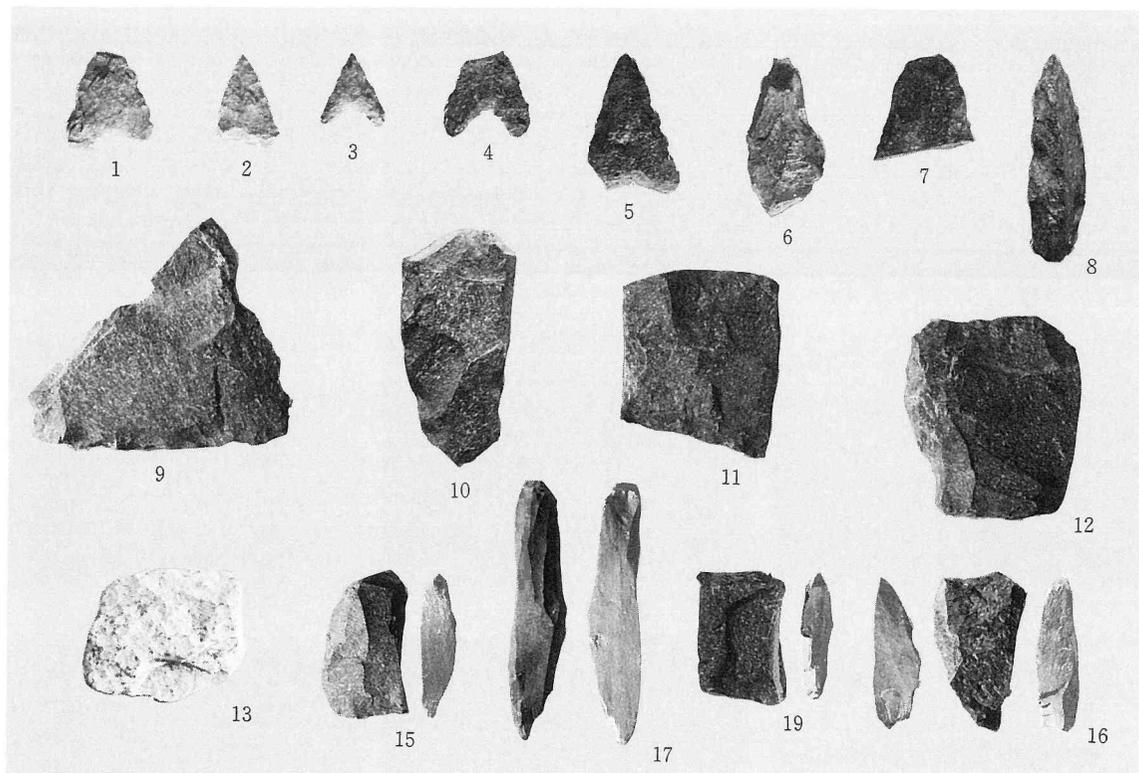


14. 棒状工具によるミガキ

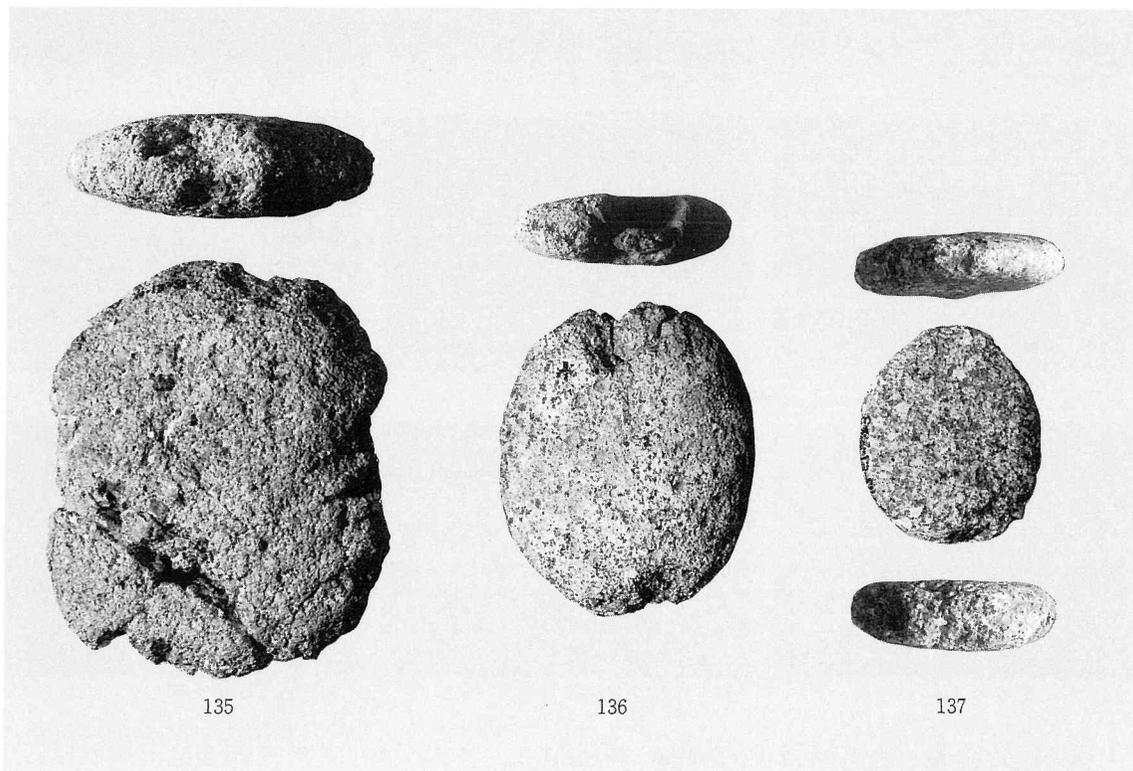


15. 巻貝条痕→縄文

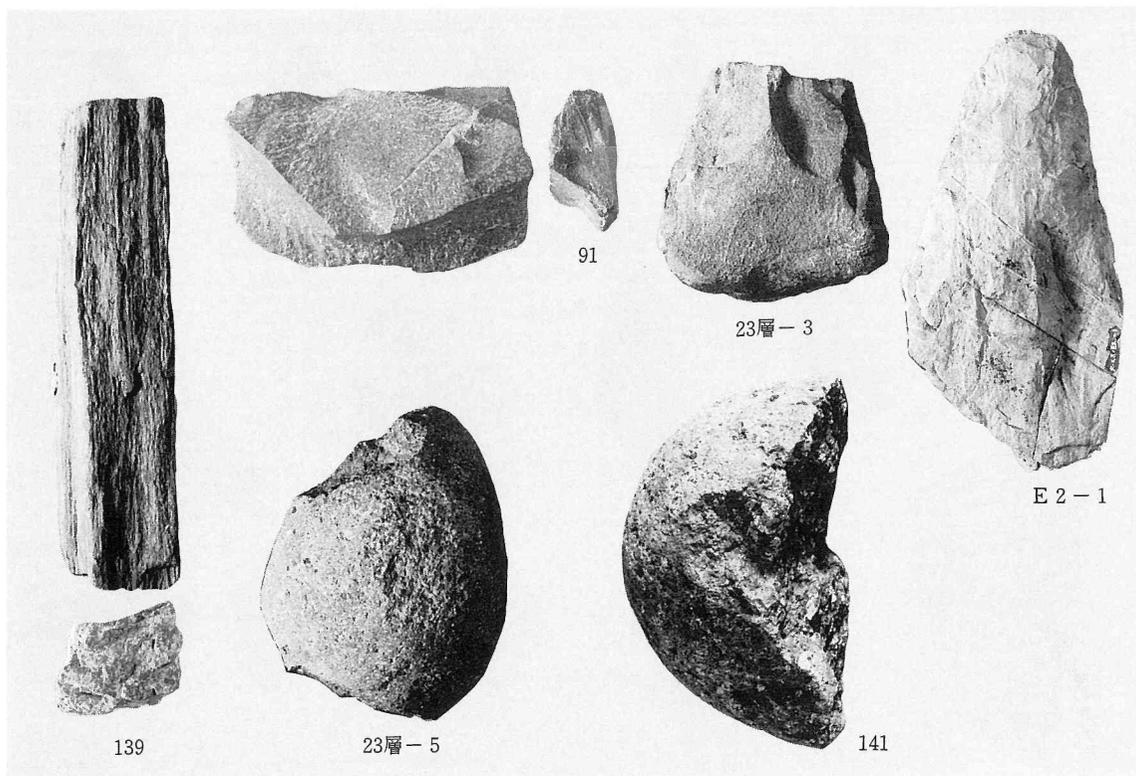
後期第IV群土器の器面成形および調整痕（縮尺約1/1）



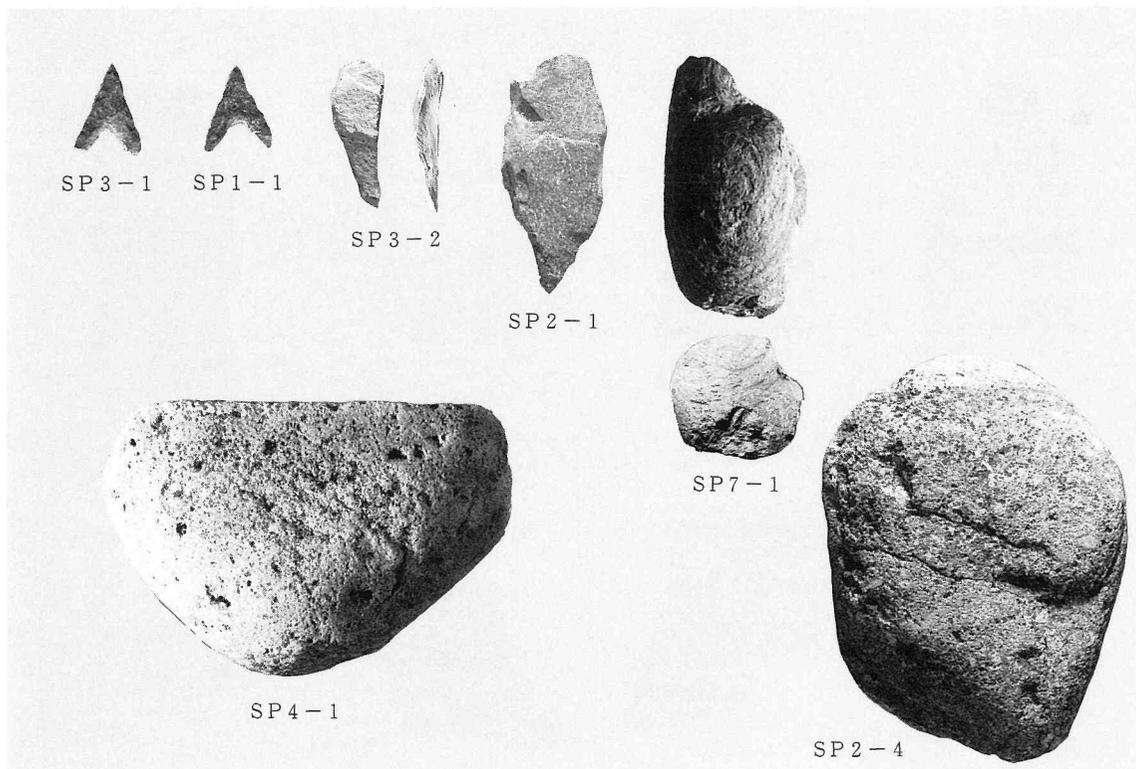
1. 25a層出土石器 (1) (縮尺2/3)



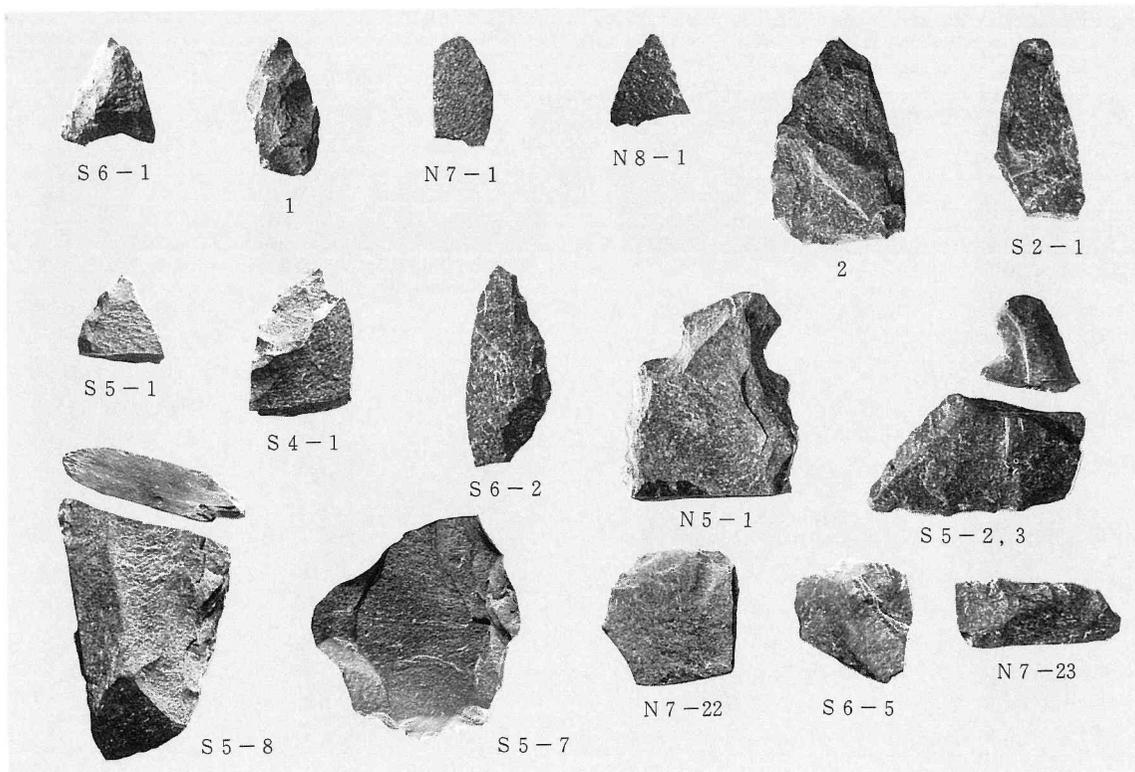
2. 25a層出土石器 (2) (縮尺1/2)



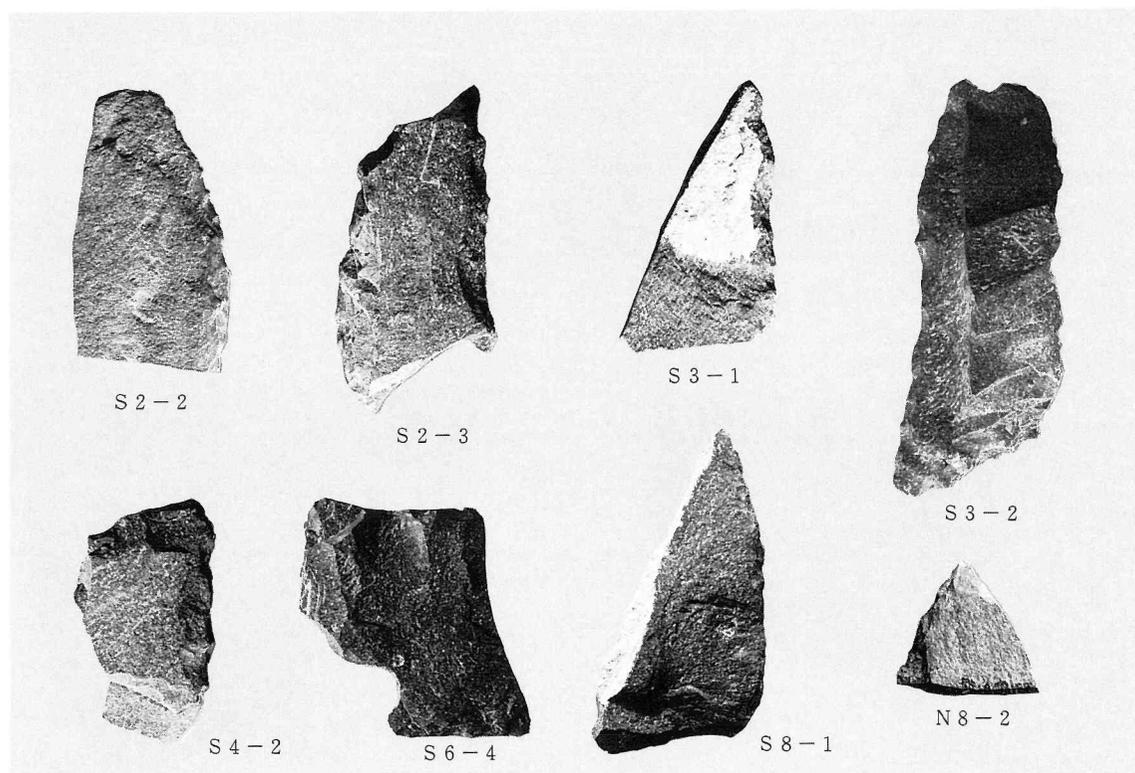
1. 25層・23層下面出土石器 (縮尺: 91: 2/3, 他は1/2)



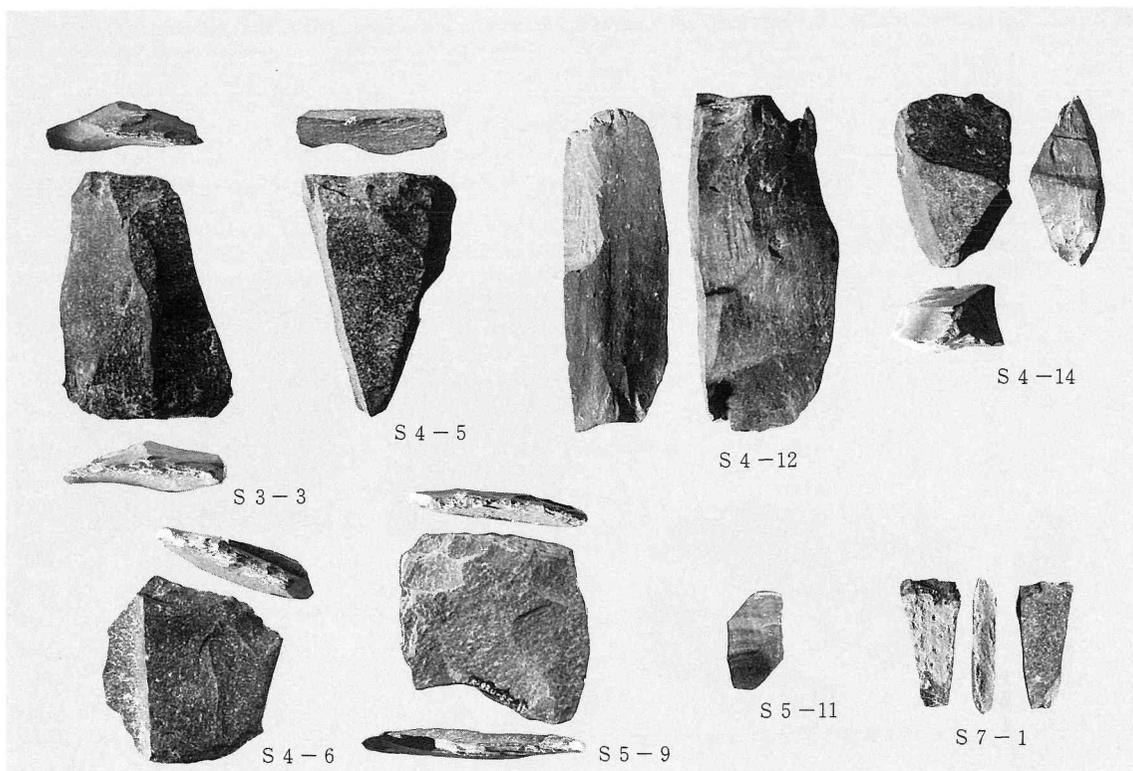
2. 貯蔵穴出土石器 (縮尺: SP7-1, SP4-1, SP2-4: 1/2, 他は2/3)



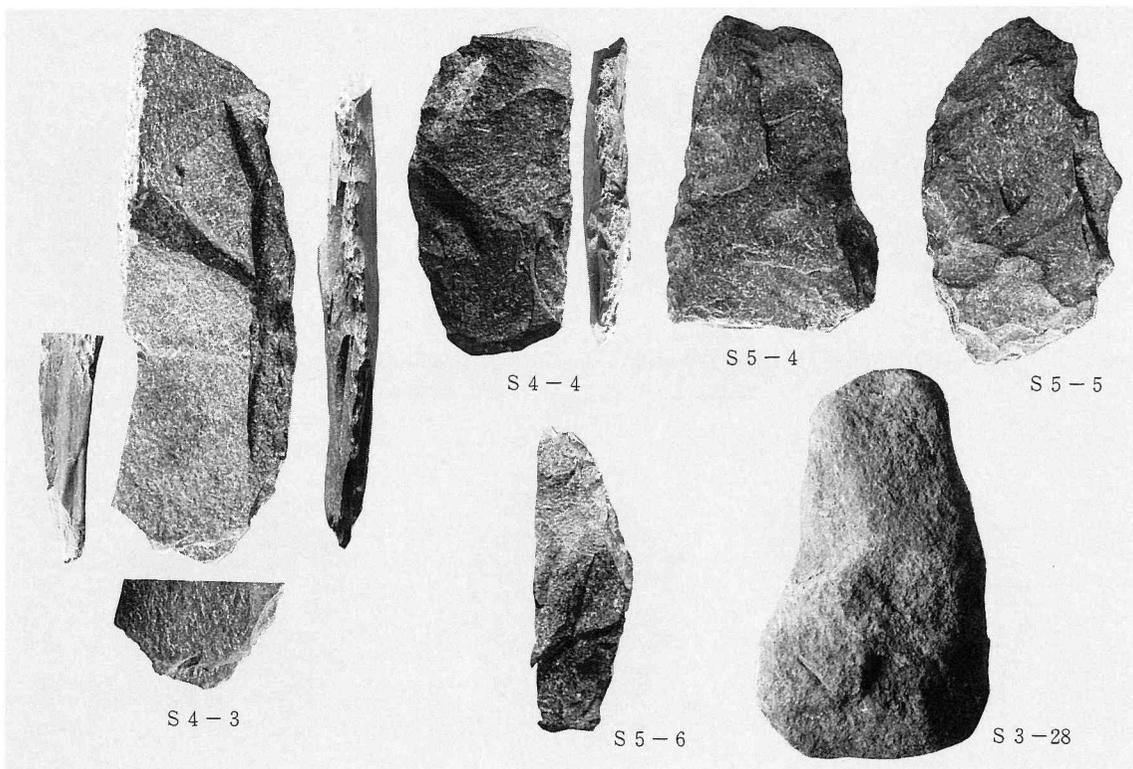
1. 27b層出土石器 (1) (縮尺2/3)



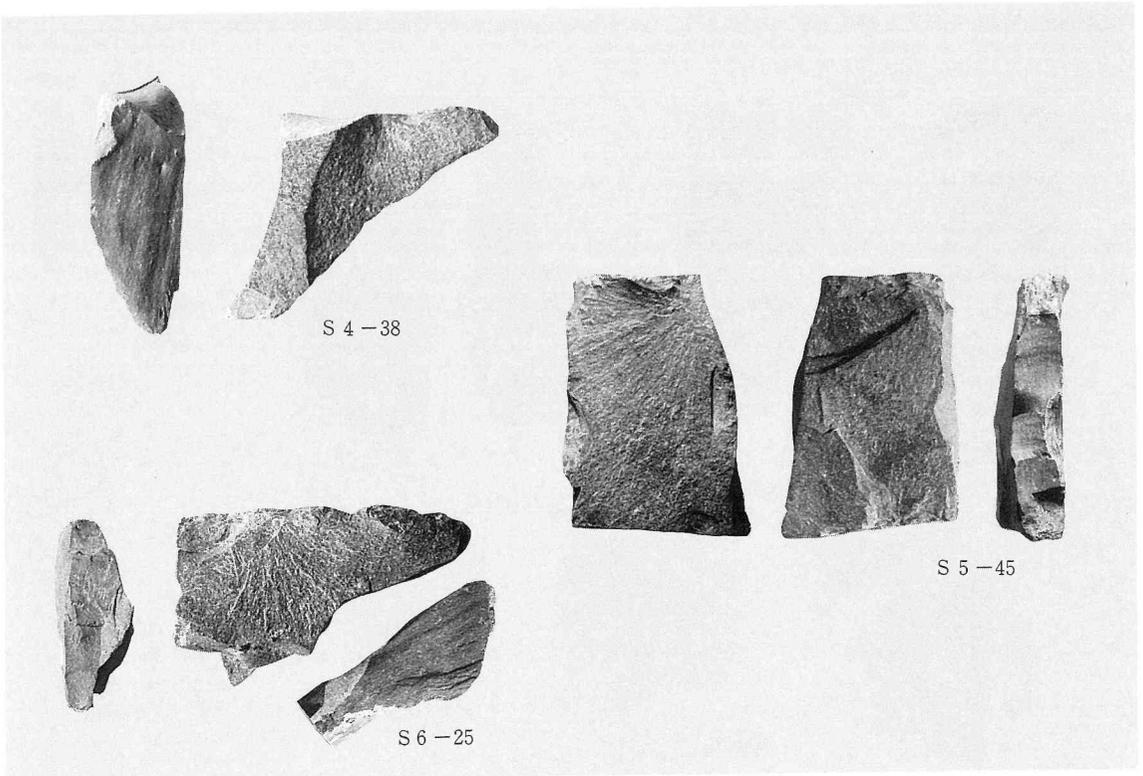
2. 27b層出土石器 (2) (縮尺2/3)



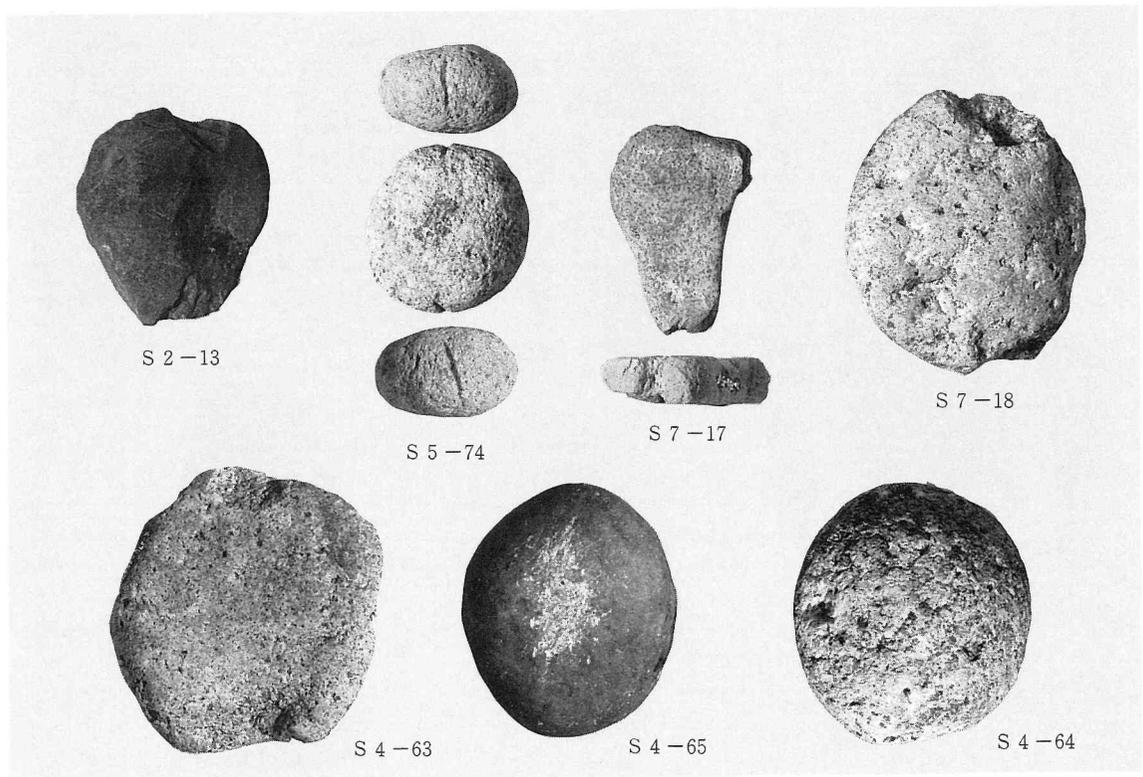
1. 27b層出土石器 (3) (縮尺2/3)



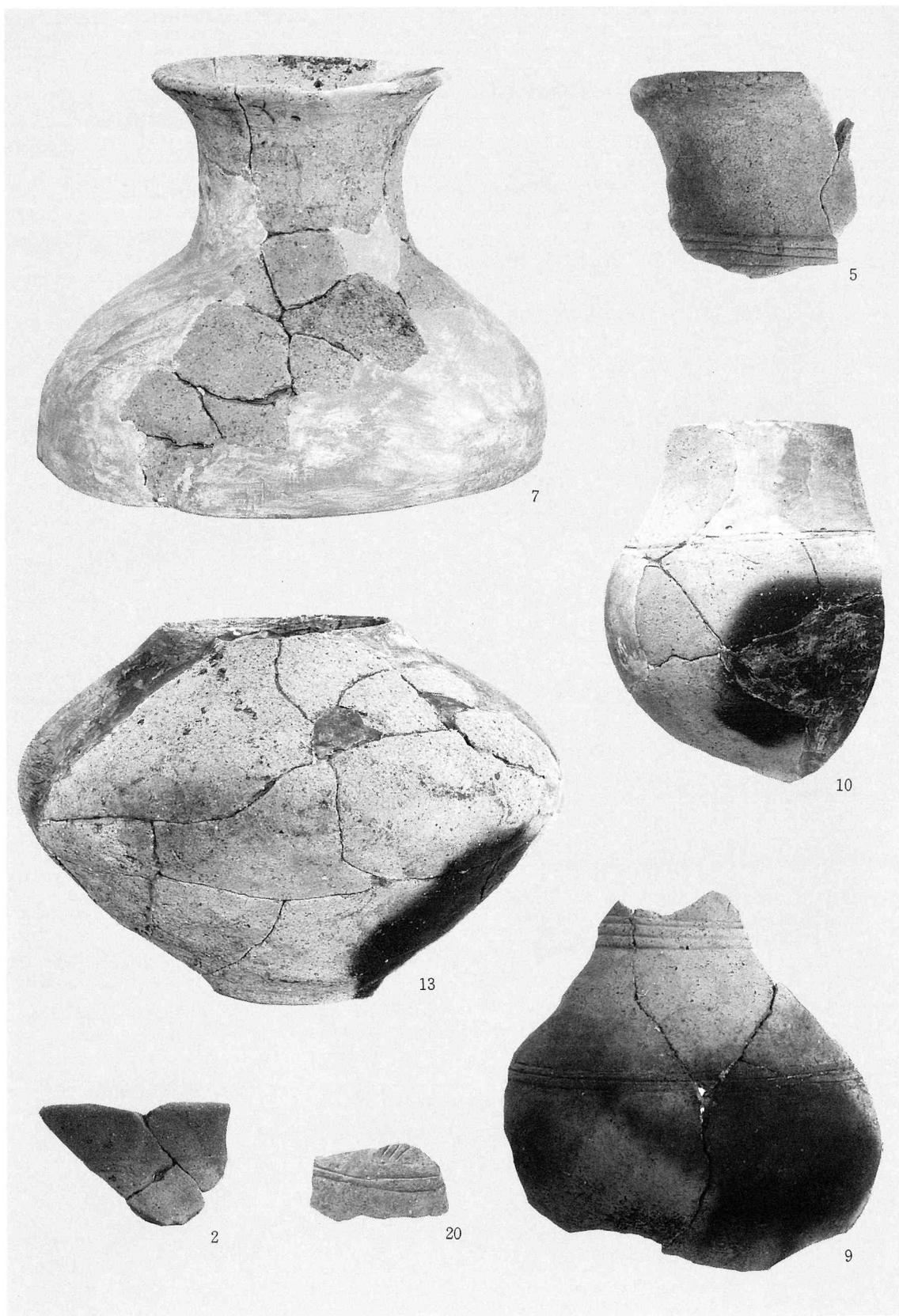
2. 27b層出土石器 (4) (縮尺: S3-28: 1/2, 他は2/3)



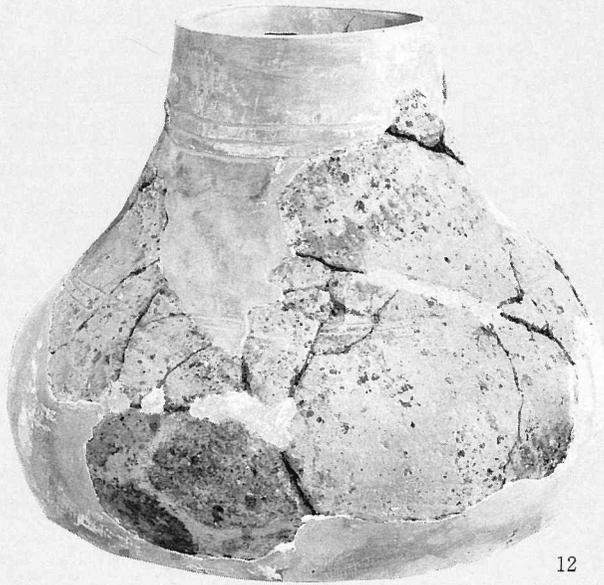
1. 27b層出土石器 (5) (縮尺2/3)



2. 27b層出土石器 (6) (縮尺1/2)



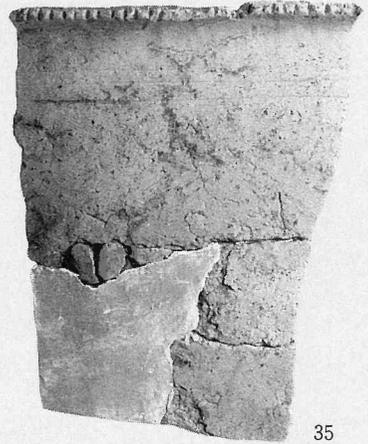
弥生前期土器 (1) (縮尺1/3)



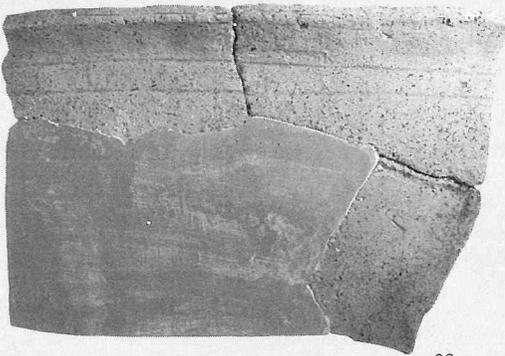
12



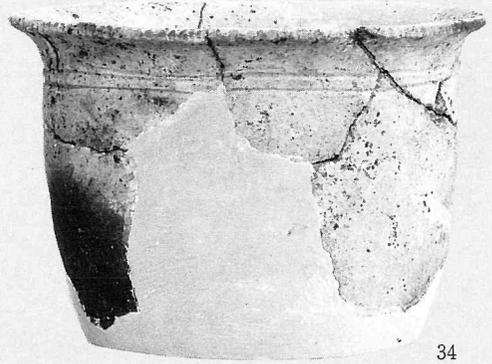
43



35



32



34



31



37

1994年3月31日印刷

1994年3月31日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊

津島岡大遺跡 4

編集 岡山大学埋蔵文化財
発行 調査研究センター

岡山市津島中三丁目2番1号
(086)251-7290

印刷 西尾総合印刷(株)横井支店
岡山市横井上90
(086)254-9001